

ユメノウツツ

中田しん

「本当はみんな感づいているんじゃないか？ この星がもうだめだってこと。」

東京は国分寺のマンションの、朝日が差し込むキッチンで、高校生の山口我夢は二人分の朝食を作っていた。その日はなぜか珍しくスコールも雷も無く、穏やかな天気だったことを我夢はあととまで覚えていた。

我夢の父の孝明は、テーブルについて携帯ツールから新聞をダウンロードし、立体映像でアウトプットした紙面を読もうとしていた。

「何、日本軍国主義の象徴である天皇制の破棄を求めるか…。東アジア連邦はまた無茶なことを言ってるなあ。」

「それ、ナイセイカンショウってやつじゃん？ほっとけばいいんじゃないの？」我夢はトースターに食パンを二切れ放り込んだ。

「東アジア連邦は日本のお客さんだ。そういうわけにもいかんさ。我夢、朝飯は何だ？」紙面から目を離さずに孝明は我夢に話しかけた。

「トーストと目玉焼き。あと合成牛乳。」

「合成牛乳か。生の牛乳が懐かしいな。」

我夢は熱したフライパンに食用油をスプレーし、慣れた手つきで片手で卵を割り入れた。鶏卵は鳥インフルエンザの蔓延で入手困難で、一般に流通しているのは合成卵だ。

孝明にとっての妻、我夢にとっての母は九年前に事故で他界し、それから孝明は男手ひとつで息子を育ててきた。朝食は父子で一日交替の当番だ。

「親父、マーガリン出してくれる？」

「ああ。」

孝明は視線を新聞から離さずに、傍らの冷蔵庫に向かって、
「冷蔵庫、マーガリン出してくれ。」と話しかけた。冷蔵庫は女の声で、
「はい。マーガリンですね。」と答えると冷気が抜けないよう小さな扉を開いてマーガリンのカップを吐き出した。

新聞に夢中の孝明は手探りでマーガリンのカップを取るとテーブルに置いた。強毒性口蹄疫の影響でバターは一般市民の手には入らない時代だ。

テーブルには花が活けてあった。市から毎日夕方に派遣されてくるヘルパーさんが置いていったものらしかった。

孝明はその花も目に入らない様子で、空間に半透明に映し出された紙面に一心不乱に見入っていた。

「我夢。」

「なんだよ、まだ焼けてねーよ。」

息子はちら、と父を見てはぶつきらぼうに答えた。

「母さんが生き返るかもしれんぞ。」

父は新聞から目を離さず、突拍子もないことを言っただけだった。

「はあ？何だそりゃ。」

息子はあつけにとられた顔で父親をまじまじと見つめた。フライパンでは目玉焼きが焦げそうになっている。

「ほら、見てみる。」

父親は携帯ツールを掲げ、立体映像の紙面を息子に見えやすいようにした。孝明が操作すると、お目当ての記事がテーブルの花を飛びこしてにゅるっと流れ出てきた。

「ついにデジタルコンバートの一般公募が始まったぞ。うちもデジタル世界に引っ越しできる。疑似人格だけど母さんの再構築もできるはずだ。」

デジタルコンバートが何たるかは我夢もよく知っている。ゆくゆくは全世界の全人類が量子コンピュータの中に移住するのだ、と学校の公民科の先生も言っていた。

「うちも申し込むの？」

「母さんと三人で暮らすのがうちの本来の姿だ。そうだろ？」

「うん。」

そうは言っても我夢にとって小学校一年の時に亡くした母親の記憶はあいまいで、何となく甘

い匂いとやわらかい大きな体をおぼろげに覚えているのみだったのだが。

「それにお前、好きな土星でも木星でも行って見てこいよ。デジタル世界にも学校はある。リアルの吉祥学園から転校手続きも取れるだろう。それにデジタル人間になったからって今の友達と会えなくなるわけじゃない。」

父親は水を得た魚のようにまくしたてた。

「ほら、中等部のころから仲が良かったやたら絵のうまい...。」

「頼舵？」

「そう竹島頼舵君。彼とも立体映像ごしに会えるだろう。それともお前、好きな子でもできたか？」

「親父、ちょっとハイになってねえか？」

「いいじゃないか。俺は夢華を愛してるもん。」

孝明は久しぶりに妻の名前を口にした。

我夢は母親が祀られている、仏教でも神道でもキリスト教でもない小さな祭壇を眺めた。家族に特に決まった宗教は無いから、父子が好きなように作った祭壇だ。生前身につけていたアクセサリーや写真の数々。もちろん母親の立体写真は何も話しかけてはくれない。

「早速申し込むぞ。いいな。」

「いいよ。」

その一言が、その後我夢を取り巻く人々の運命をどう変えただろう。

I Hヒーターの上のフライパンは、目玉焼きが焦げだすのをセンサーが感知してエネルギーをカットしていたが、デジタルコンバートの手続きは父親の携帯ツールを使って目玉焼きが冷める前にあっという間にあっけなく終わった。

「会社でデジタル支店への転勤願いを出さなくちゃな。デジタル東京には吉祥学園の分校が出来るはずだ。転校を申し込んどくぞ。」

有頂天な父はトーストにマーガリンを塗りながら、そんなことを喋っていた。

—本当はもっと深刻な話なんじゃないのかな...

息子は何と無くそんなことを考えていた。

東京は珍しく穏やかな天候の朝だった。

我夢は夜が好きだった。

灯りを消して布団に入ってから見える暗い部屋の中の風景。窓から入ってくるほのかな街の灯り、虫の声、近所を走る車の気配。眠りは違う世界への入り口のように、いつも彼をわくわくさせてくれた。彼は夢の世界で空を飛んだり、ロボットを操縦して怪獣と戦ったり、見知らぬ外国の街角を歩いたりした。目が覚めて、現実の世界の中で朝飯を作って食べ、いつもの町に出かけても、夢の中の経験が思い出されて、自分にとっての現実を果たして学校に通う自分と空を飛ぶ自分と、どっちなんだろう、などと考えたりするときもあった。

夢を見るのは浅い眠りのときだという。そうだとすると、自分は人よりも深く眠ることのできない体質なんだろうかと思ったりした。それはそれでなんだか損な気もしたのだが、まあいい。

高校一年生の山口我夢が考えていたことはそういうことだった。だから、人類が量子コンピュータの中のデジタル世界に移住するという、通称「ラックナウ合意」は我夢には抵抗なく受け入れることができた。現実だという自覚さえあればその世界は現実だろうが夢だろうが、現実なのだ。現実と夢の世界。デジタル世界はどっちに近いのだろうか。デジタル世界の中にも眠りや夢はあるのだろうか。

テレビニュースでも新聞でもネットでも学校でも当時はラックナウ合意の話題でもちきりで、賛成派反対派それぞれが熱く語っていたものだ。

ラックナウ合意とは、2091年に先進国首脳会議サミットを構成する国々、アメリカ、日本、ロシア、カナダ、EU、東アジア連邦、インドの首脳がインドの都市ラックナウに集まって開かれたサミットでの合意事項で、先進国であるサミット構成国は3年間でその人口のほとんど、その後10年間で全世界の人間全てを量子コンピュータによって構成されるデジタル世界へと移住させるという人類始まって以来の大プロジェクトで、国連総会でも追認された。日本はシナプスキャン分野では進んでいて、日本の全人口をデジタルコンバートするのに一年かからないとされていた。

子供の割に報道の好きだった我夢は小学生の頃、父と一緒に見た国営放送のスペシャル番組で人類のデジタル世界への移住プロジェクト、デジタルコンバートについて知り、それから折々のニュースでその進展を眺めていた。だから大抵の同級生よりこの問題について詳しかった。

ラックナウ合意についても我夢にとってはある程度予想できたことではあったが、ただ世界情勢の変化は我夢の想像よりはるかに速かったのだ。

呑気な子供には想像もできないほど人類は追い詰められていたのだった。

前世紀から科学者の間では研究されていた地球の環境の激変が、もう少しで22世紀を迎えようという人類の生存にとって限界に近くなってきた。地球表面の温度は21世紀初頭から平均4度上昇し、北極の氷の面積は10分の1に、砂漠の面積は3倍になった。海面上昇で冠水し、放棄された土地も多い。二酸化炭素濃度の上昇のみならずついに酸素濃度が低下しだした。異常

気象。環境汚染。廃棄物。破局的気象変動（気象ジャンプ）。絶滅した生物の数々。発展途上国人口の急増による飢餓。貧困。そんな中でもおさまらないテロ、紛争の数々。

それ以前から地球環境に人類がかける負荷とその弊害についてはさんざん問題視されてはいたがその対策としては50歩100歩といったところで決定打は無かった。何もかもが手遅れに思えた。このままではこの星はとりかえしのつかないことになりつつあった。

しかし人間がバーチャル世界に「引っ越し」をしてしまえばその環境負荷は一万分の一以下になる。

この時代、日本のほとんどは亜熱帯気候になっていて、美しい四季の移り変わりというのは過去の話となった。春といえば桜が咲くのが日本の常識だったが、今では春に向日葵が咲く。我夢の住む国分寺の街は21世紀初頭はずいぶんにぎやかだったという。それが人口の減少とともに櫛の歯が欠けるように空家が目立つようになり、治安の悪化もあって市の主導でスラムと化しかねない廃屋、廃アパート、廃マンションの群れの解体撤去と跡地への植栽が進められた。人口の減少で税収が減った国分寺市はその費用をねん出することができず、結局その作業のほとんどはボランティアの手作業だった。我夢の父の孝明も若いころその作業をしたことがあるという。そして相続人がなくなった土地は国の土地になった。そんな土地がモザイクのように広がっていった。

こうして東京の西に広がる多摩地区は、往時の江戸郊外の姿に戻るように、次第に林の面積が増えていった。

それは多摩地区だけでなく日本各地で起こっていた現象で、むしろ多摩地区は都会に近いだけまだましな方だった。大都市以外の地方はそのほとんどが過疎地帯となり、さらに無人となった地方の平地にはロボットが管理する野菜工場や畜産工場が林立していた。

食料の自給率を上げることはできたが、日本はいびつな人口構成からくる問題を解決できず、21世紀初頭と比べると実にその人口の半数とそれに比例する国力を失っていったのだ。

「黄昏の時代」とは誰が言い出した言葉だったろうか。その言葉は重い空気のようにその時代の日本人を覆う時代の気分を表す言葉だった。

吉祥学園高等部のUVカット仕様で長袖シャツの制服を着た我夢はぎらぎらとした朝日に照らされながら所々林となった街を国分寺駅北口へと歩いていった。

顔面を覆う半透明のマスクはこの時代の日本人の外出の常識だ。大気中の汚染物質やアレルギーをフィルターで濾して酸素を吸わねばならない。直射日光を目に入れることも危険だ。サラリーマンもOLも子供も一人残らず同じようなマスクをしていた。

「我夢！」

突然我夢の後で女の子の声がしたと思うと我夢の背中にどつとやわらかい重量がかかった。「うわ、何だ諫宮か。」同じ吉祥学園の女子の制服を着た幼馴染で同い年の諫宮るみなの体当たりによろけた我夢だった。

「ゴルァ！何で下の名前と呼ばない？」言いながらるみは我夢の背中に抱きついた。

「ちょ、諫宮、あ、その。」年相応の胸が我夢の背中に密着している。

「我夢、えろーい。」

「どっちがだよ！」

二人はひゃあひゃあとふざけながら国分寺駅北口に到着した。自動改札に右手をかざすと右手甲の中に埋め込まれたICタグが個人を認識し、それが通学定期契約をしていることを区間とともに立体映像で自動改札に表示する。

我夢もるみなも同じく「通学定期・JR国分寺—JR吉祥寺」と表示される。

2両編成の中央線複々線新交通システムリニアはひっきりなしに動くホームについては乗客を出し入れしている。乗客の待ち時間は20秒以内だ。ドアの上に大きく停車駅が立体表示されている。無人運転の車両はノンストップの特快仕様なら国分寺から新宿まで12分しかかからない。吉祥寺までわずか6分だ。

二人は吉祥寺と表示されている車両を選び、乗車した。ドアが閉まるとるみなのは、「ぷあー。」と言いながらマスクを脱いだ。

「鬱陶しいたらありやしない。」

我夢も苦笑しながらマスクを脱いだ。

リニアが加速しながら本線に車線変更するところに、我夢は同じ車両にるみなと同じ制服を着た見知らぬ女の子が吊革につかまっているのを見つけた。

見たところなかなかの美少女のようだ。制服の黄色いリボンの色で我夢たちと同じ高等部一年ということがわかる。中等部からエスカレーター式に高等部に上がった我夢とるみなが知らない顔ということは、この春から入学した外部生らしい。彼女もほぼ同時に我夢たちを見つけたようで微笑んで我夢たちに会釈をした。我夢もそれに答えて会釈を返した。その様子がるみには不満だったのか、小声で我夢の耳に向かって、

「なーに鼻の下のぼしてんのよ。」

とつぶやいたかと思うと思いきり我夢の手の甲をつねった。

「いてててててて」

「ふん。」

「何で...？」何で自分がこんな目に会わなきゃならないのか我夢には理不尽に思えたのだった。

その様子がおかしかったのかその女子は上品にほほ笑んだ。

リニアは吉祥寺駅に滑り込んだ。列車は歩くほどのスピードで動く上りホームと同調して動いている。我夢もるみなも文句を言いながらマスクをかぶり、リニアを降りた。振り返ると乗ってきたリニアの上に「荻窪」と立体表示が映し出されていた。改札で立体映像表示をのぞき見した我夢は、

「青梅街道か。」とつぶやいた。先ほどの美少女の改札立体映像に「通学定期・西武多摩湖線青梅街道・国分寺乗換・JR吉祥寺」と表示されていたのを盗み見たのだ。るみながこれに気付かないはずはなく、こんどは首の後ろをつねられた我夢だった。

「この、暴力娘が！」

「なによこの変態！ストーカー！」

「何で俺がこんな目に遭わなきゃならないんだよ。お前は俺の彼女か？」

「な、なに突然、変なこと言わないでよ！」

なぜか真っ赤になったるみなのは、もじもじと両手の人差し指をからめあいながらふくれっ面

になった。

「あはははは、かわいいなお前。」

「あ！我夢！お前ってやつは一！」

若者たち-2

吉祥寺駅は国分寺駅と同じく歴史のある駅だ。駅前の繁華街は往時の賑わいを失ってしまったが、それでも「おしゃれ」な店と横町の間口一間の飲み屋は健在だった。

吉祥学園は駅から徒歩5分、私立の中高一貫校で、子供人口の減少に伴い学校自体の数が減少したこの時代においても人気があった。朝夕は吉祥寺駅から学校まで学生の行列ができる。

我夢は校門近くで同じ美術部に属する親友、竹島頼舵を発見した。

「よう、バイクメンおはよう。」

「我夢、バイクメンはやめろ。しかもなんで複数形なんだ？」

頼舵は「ライダ」と読むためにバイクメンというあだ名を無理やり我夢につけられてしまったのだ。調子に乗ったるみなまで、

「バイクメンおはよー！」と話しかける。この三人はみな美術部だ。

「諫宮おはよう。その呼び名はやめろ。」

「なあバイクメン、例の数学の課題やってきた？」

「もちろんだ。その呼び名はやめろ。で、いつものことながらだいたい想像はつくが。」

「それだ！」

「何がそれだよ。我夢、自分でやらないとテストの時に痛い目を見るぞ。」

「それはそれ。これはこれ。そういうわけであとで写させて。」

我夢は片手で頼舵を拝むと満面の笑みを作った。頼舵は渋々といった表情だ。

その様子を見ていたるみなは、

「仕方ないよね。バイクメン成績いいし。我夢はぼんくらだけど。」

「その呼び名はやめろ。」

「諫宮、それは聞き捨てならない。」

「だから下の名前と呼べといつも言ってるでしょうがッ！」

彼らの朝はいつも騒々しい。

放課後。吉祥学園の美術室は北棟4階の西の端にある。美術部員が三々五々集まってくる。みんな思い思いにイーゼルを立てたりデジタルキャンバスをいじったりしていた。部活は中等部とも合同なので、結構な人数がいる。この春から部長を務める高等部二年の霧島獅子が全員に向かって手を挙げながら、

「全員注目！」と声を上げた。

「今日は新入部員が来てます。高等部一年の森村さん。部長の霧島です。」

そう言われて軽く会釈したのは今朝中央線で出会った美少女ではないか。我夢は目を丸くして驚いた。ひゅうと口笛を吹きたい心境だった。驚いたのは我夢だけではなくもちろんるみなもだ。こちらは複雑な表情で我夢と森村と言われた見学者を交互にじろじろ見た。

「部員には前も言ったけど、今年はビシビシと！やるつもりは全くないから今日は安心してまずは見学してってください。元々うちら美術部は運動部と違って上下関係がはっきりしてないのが社風なもので」

「なんだよ社風って。会社かよ。」茶々を入れる部員がいる。

「んー、副社長の椎名です。ふふー。」

美術部一まったりしている椎名かちゆのあだ名はおかーさんだ。

「おかーさんまでボケ倒しか。」

「森村さーん、自己紹介お願いネー。」かちゆが促した。

「高等部一年の新入部員森村みらんです。えーと、彫刻のネコが好きです、あはははは。」「わははははは、何がおかしい？」部長の獅子が自分で笑っておきながらツツコミを入れる。

「えと、よろしく〜。」ぱちぱちぱちとまばらに拍手が沸いた。

ーいいかもしれない！

我夢はふんっと鼻息を鳴らすとわくわくした表情でみらんを見つめた。

ーか、かわいい！

バイクメン頼舵もまたみらんを見つめている。

ーおもしろくない！

るみなは頼舵を横目でにらみつけながらデジタルキャンバスの電源を入れた。

デジタルキャンバスはこの時代一般的な画材で、A全B全からA5B5まで各サイズあり、要は超高精細液晶画面と超鋭敏なタッチパネルが一緒になったようなもので、指で触れば指紋が付く、筆でなでれば絵が描ける。それを動かすソフトはメーカーによって数種類あって、21世紀初頭の画像処理描画ソフト、フォトショップやペインターの超高性能版のようなもので、RGBモードでもCMYKモードでも64ビットフルカラー、発色は繊細で、鉛筆、パステルから油絵まで実際の画材をシミュレートできる。この技術は21世紀初頭にはほぼ確立していた技術なので低価格化と軽量化が進み、この時代、我夢のような高校生でも手の出る金額で大画面のデジタルキャンバスを手に入れることができた。

竹島頼舵は窓際に座り、アグリッパの鉛筆（モード）デッサンをしていた。中学時代から頼舵はデッサンが得意で、将来美大合格も夢じゃないと言われ美術部でも一目置かれていた。

「あの、すごく上手ですね。」1人ずつ作品を見ていた森村みらんが頼舵の作品を見て感嘆の声を上げた。頼舵はまんざらでもない様子でにまにましながら鉛筆の手を休めずに、

「これはいまいちの出来。」

隣にいた我夢は横目で頼舵とみらんを見ながら、

「でもこいつ抽象画は下手だから。」とくちばしをはさんだ。

「我夢、ほっといてくれ！お前だって星の絵しか描かないじゃないか。」

「星の絵？」みらんは興味をそそられたみたいで我夢のキャンバスを見てみた。そこには油絵モードで色鮮やかな未知の惑星が描かれている。

「これは何の星ですか？」

「想像上の星。こんな惑星は実際には無いかもしれないけどね。その時の気分で色を変える。」

「現実逃避ってやつだよ。」頼舵が横から茶々を入れる。

「あのなあ！」

「デッサンは絵の基本だよ。しっかりしたデッサン力がないとまともな絵にならない。やみくも

に抽象画を描いてもデッサン力が無いと絵に説得力がない。特に今日は集中力が無いぞ我夢。何か気になることでもあるのか？」頼舵が得意そうにまくしたてた。

「いや、バイクメンお前…！」

「だーかーら、バイクメンはやめろって。」

「お前らそんな風にしとけよ。喧嘩は表へ出てやってくれ。ここは神聖な美術室だぞ。なあ、おかーさん。」さすがに獅子が仲裁に入った。

「ま、二人はいつもこんな感じなんだけどネー。」おかーさんことかちゆがみらんをフォローを入れた。

「はあ…。」みらんは苦笑するしかなかった。

るみなは我夢を横目で見ている。その我夢はみらんを見ている。

「んー。恋だネー。」かちゆが呟いた。

若者たち-3

東京のビル街をバックにニュースオープニングタイトル。カットスタジオに変わり、アナウンサーが一礼する。

「こんにちは。NHKお昼のニュースです。政府は先の東アジア連邦政府からの天皇制破棄の申し入れに対して、東アジア連邦大使を官邸に呼び、先の申し入れは日本としては到底受け入れられないと正式に回答しました。これに先立ち飯岡官房長官は記者会見で、東アジア連邦の申し入れは内政干渉であり、受け入れられるものではない。先の大戦については過去に謝罪をしており、中国に対しては賠償を放棄したのは当時の中国政府であり、韓国に対しては過去の条約にて賠償済みであるとの談話を発表しました。これに対して東アジア連邦国内で反発の声が上がるのは必至で、両国関係に影響を及ぼすことが心配されています。この談話を受けて東証では輸出関連銘柄を中心に値を下げており、午前の東証平均終値は昨日より300円近く下げています。」

井の頭公園は地球温暖化や強毒性鳥インフルエンザによる影響で、21世紀初頭と多少魚や鳥の種類が変わったが都会のオアシス的存在は変わらず、桜の咲く季節は変われど桜の名所だった。

吉祥学園美術部の面々が写生に出かけたのは部長霧島獅子の発案だ。

「マスクが鬱陶しいなあ。」汚染物質よけのマスクにたまらず漏らしたのは我夢である。

「そう言わずに、たまには風景画も描こうぜ。」獅子はそう言ってみんなをなだめ、池の縁の斜面までみんなを引率した。

皆それぞれ思い思いの場所でイーゼルを開き、デジタルキャンバスの電源を入れた。デジタルキャンバスはバッテリー駆動もできる。

我夢、頼舵、るみな、みらん、かちゆ、獅子はなぜかひと塊りになって陣取った。気になる人の近くにいたいというのは自然なことではあろう。

「鳥は動くからいけねー。描けねー。」はなからやる気の見られない我夢はそう言って、絵筆を鼻の下にはさんだ。

「心の目で見ろ。目の奥で円を描き、幻を追い払え。」獅子はいきなり歌いだした。

「なんですかそれ。」

「中世の歌。坂本龍一だよ。じいちゃんから教わった。」

「へえ、坂本龍一ねえ。アカデミー賞受賞者であだ名は教授。」

「バイクメンよく知ってるな。」

「バイクメンはやめろ。」

「だべってないで描けよゴルァ！」

「うわ、るみなが怒った！」

そんなみんなの様子を見てみらんがほほ笑んだ。

「むー。」我夢は腕組みをして辺りを見回した、ふりをしてみらんの絵を見た。

「森村さん、なかなか上手いじゃん。」

「ありがとう。」

「ゴルァ！そこ！だべってないで描く！」

「真面目に描けよ我夢。」

「えらいすんません。」我夢は自分の後頭部をぽんと叩きおどけた。

「んー、諫宮さん部長みたい。あるいはジェラシー？」

「副部長！何がジェラシーですかッ！」

「あ、聞こえた？」

「せーの！」

「俺メンマ抜き。」

「こっち大盛り。」

「チャーシューサービスしてよ。」

「俺麺バリカタ。」

「あたしネギ抜き。」

「あたし麺やわらかめ。」

「...あの一、最初からもうすこしゆっくり言っていただけませんか？」ラーメン屋のロボットがカウンターの中で困惑していた。

「あははははAIに勝ったー。」

「いえーい！」

そのラーメン屋は値段の安さを売りにしたチェーン店で、ラーメン一杯高校生の小遣いでも充分だった。写生上がりにはラーメン屋に寄ろうと言いだしたのは我夢で、その話に乗ったのは例の6人。あらためて注文し直すとロボットは慣れた手つきでラーメンを作り始めた。我夢は切りだした。

「ニュース見た？日本政府、東アジア連邦を突っぱねたっていうの。」

「あー、あの天皇制をやめろっていうやつ？」

「東アジア連邦ってさ、あれ、一応4000年の歴史なわけでしょ？ラーメンだってあっちから来たんだし。」

「ラーメンはこの際どうでもいいだろ？」

「まそうだけどさ。文化とかあっちから来たわけじゃん。」

湯気を立てたラーメンをカウンター越しに受け取る面々。我夢はスープをずずーとすすっては話を続けた。

「美味しい。で、だから一緒になれ、ていうのがあっちの言い分だよな。」

「それはそうだけどさ、軍艦で領海侵犯とか？偵察機で領空侵犯もやってさ、演習で弾道ミサイルばかすか撃って日本を脅して一緒になれも無いよなあ。」部長の獅子が麺をかきまぜながら言った。

「日本はどうすんだらうな。」

「それは飲まないだろ、普通。だつていまだに日本に賠償しろとか金よこせとか言ってんだぜ。暴力団に絡まれているのと一緒にだ。」頼舵が憤懣やるかたないといった風に言った。

「そりゃ気持ちはわかるけど、そうしないと戦争になるよ。自衛隊勝ち目あんの？」るみなが困った顔で言った。

「知らない。」

「まともにやって勝てる相手じゃない。」頼舵が真面目に言う。頼舵は外交とか防衛といったニュースに詳しくあった。

「アメリカが助けに来てくれんじゃね？」

「いや来ないだろ。アメリカはテロだらけでそっちが大変だよその国どころじゃない。」

「じゃインド。」

「インドは日本と仲がいいけどそれも無いと思うよ。多少手伝ってくれっかもしれないけど。」

「俺は東アジア連邦が許せないな。けしからんよ。」

「そりゃ気持はわかるけどさ。」

「いざ日本がヤバくなったらデジタルコンバートして外国に逃げるかな。」

「んー。男らしくないネー。」高校生達の話題としては結果が出るはずもなかった。

デジタルコンバート-1

デジタル東京へようこそ。レポーターのNTVアナウンサー飯田綾です。私は先行マスコミ枠でデジタルコンバートしてデジタル東京に来ました。デジタル東京汐留エリアにあるNTV、Gスタジオからお送りします。

飯田さん、こちらはリアル東京の汐留NTVです。飯田さん、リアルのところと見かけが全く変わりませんか。

はい。顔面と体格をスキャンしましたから。こっちはメイクの必要が無いから楽ですよ。それにアバターを変えることもできるんですよ。ほかにも私のデータは私の脳細胞のニューロンネットワークのデータ、つまり私の産まれてから今までの記憶や性格や体質ですね。それから私のDNAデータ等がいわゆる私の人格データとして保存されています。

個人データの保護は万全ですか？

こちらにも警察があります。もちろんプライバシーは確保されますが、他人の個人データに不正アクセスすると違法になりますから警察に逮捕されます。移動は足跡データが残りますから警察から逃げることはできません。

ついに人類の念願であった不老不死の実現です。

この世界には病気もありません。痴ほう症などもシナプススキャンによって記憶がよみがえるんですよ。

寝たきりのお年寄りも若返ることができます。若返って自分の好みの年齢になることができますが、リアル年齢より年上に設定することはできません。

新たに子供を作ることもできます。もちろん自分で育てなければいけません。

リアル世界から持っていきたいものはデジタルデータであれば1人10テラバイトまでは無料です。それ以上は課税されます。たとえば自分のクルマをバーチャル世界に持っていきたいければカーディーラーに車を持ち込み、デジタルデータに変換してもらってください。普通乗用車ならおそらく1ギガバイト程度になるでしょう。でもバーチャル世界のカーディーラーでクルマを買うこともできます。部品劣化がないのでクルマの故障はもうありません。

割安にはなるけれど不動産や家財を政府に買ってもらい、その資産はバーチャルに持つことができます。ローンや借金などは自動的に継続されます。

全ての日本国民にはまず無償で1人三坪のバーチャルホームが支給されます。それからお金をかければ土地を買ったり家を建て増しすることができます。家の中の部屋が離れた土地にあってもどこでもドア設定で一軒家と同じ感覚で住めます。

もちろん納税の義務はあります。

食事はどうなるんですか？三ツ星レストランの味も予約なしで味わえます。もちろん自分で料理もできますよ。私、トマトクリームのパスタを作るのが得意なんです。先日デジタルのキッチンで作ってみました。同じ味でしたよ。一人前作ればあとはそれをコピーして何人前にも増やせます。出来の良い料理を作ったら保存して売ることができます。もちろん料理にも著作権はありますから、他人のレシピで作ったものを売るとは犯罪になります。

全ての物には自動的に持ち主データと名前がつきます。名前を覚えておけば無くしてもすぐ家

の中を検索して探し当てることができます。

ほとんどの大企業はすでにデジタル世界に本店機能に移しています。仕事は、業種によってはリアルの時の仕事がデジタル世界では用なしになってしまうこともあります。たとえば医療関係や介護関係などはデジタル世界では基本的に病気が無く全ての人が健康で、自分の好きな年齢に戻れるので仕事がありません。そういう方は大変ですけど転職していただくことになります。

デジタル世界への移住で、地球への環境負荷はリアル人間の一万分の一以下になります。地球環境はゆるやかに復活していくことでしょう。

「昨日のデジタルコンバートの番組見た？」

「見た見た。で疑問なんだけどさ。」

放課後の美術室は今日も美術部員が集まっている。

「デジタルコンバートすると今の体ってというか今の意識はどーなるわけ？」

「知らないの？そりゃ寝ているうちに安楽死処理するんだよ。」デジタルコンバートに詳しい我夢が答えた。

「やだそれ。」

「つまりコンバートっつって結局自分をコピーして自分は死んじゃうわけ？」

「でも実際わかんねーって。わかんねーうちに気がついたらデジタル世界の住人だ。」

「リアルな体を安楽死させなかったら自分が二人になるわけ？」

「そりゃそーじゃん？」

「それもどーかな。」

「ねえところでみんなプールいかない？」

「なんか話題が飛んだな。」

「俺は海に行きたい！海行こうぜ海！泳ごうぜ！」

「バカ。皮膚がんで死になよあんだ。」

砂浜の減少と危険な太陽光線で海水浴は過去のレジャーだった。

「しかもまだ春だよ。」

「デジタルコンバートすりゃ海だろうが空だろうが。」

「バーチャルかよ。プールにしとこうよ。」

東アジア連邦各地では反日デモが激化していた。この原因は中共、朝鮮独立時代から続いていた反日教育が完全に東アジア連邦人民に浸透し、また連邦政府が愛国心を高めるためにかつての敵であった日本の蛮行をセンセーショナルにあおりさらに20世紀よりも強烈な反日教育を行った結果だった。

しかもかつて共産党が一党独裁していたころは国家の意思でデモの鎮圧も容易だったが、民主化を果たした現在において政府の意思を国民に強要するのは不可能になっていた。さらに東アジ

ア連邦政府はこのデモを民意と受け取り、日本に対して強硬な姿勢を崩さずにいた。

東アジア連邦政府は在北京の日本大使を数回にわたって呼び寄せ、日本政府の態度は懲罰の対象となるとして恫喝に近い態度で言い渡した。これをうけて日本政府は恫喝には屈しないと声明を発表。両国関係は一層の悪化を辿っていた。

一方アメリカ合衆国大統領は日本を支持すると声明を発表し、ハワイ真珠湾から空母バラク・オバマを中心とする機動部隊を日本に派遣することにした。

放課後の美術室では森村みらんが木片を彫っていた。傍らでは諫宮るみながデジタルキャンバスで人の顔をモデリングしていた。

みらんが手を止めて我夢の後ろ姿を見てため息をついているのを、るみなが見逃すはずはなかった。るみなのは小声で「森村さん、あんた我夢のこといつも見てるでしょ。」

かぶりを振るみらんはまた小声で、「え？そんなことないよ。」

「あんたがそんなだったら我夢取っちゃうぞ」

「え？と、取れば？」

がばっと立ち上がり大声で「ゴルァ！」一同るみなを見る。

「何やってんだ？」

我夢も振り返った。

副部長かちゆに羽交い絞めにされたるみなのはじたばた暴れながら、「あんたがそんなだから！あんたがそんなだから！」等とわめいている。。そのままかちゆに引きずられて美術室から退場させられていった。

「...まあいつものことだが。」事情を知らない我夢はまたデジタルキャンバスに向かった。

雨季に入って毎日スコールが降る吉祥寺は吉祥学園のお昼時。生徒の基本は弁当持参だが校内にパン屋が入っていて、弁当を持ってこれない事情のある生徒に対応していた。

我夢はひとり親だし自分で弁当を作る趣味も無かったので、お昼はだいたいパンで過ごしていた。頼舵は親が海外に行っていて1人暮らし同然なのでこれもまたパン屋のお世話になっていた。

「我夢、昼飯買いに行こうぜ」

「おうバイクメン。」

「バイクメンはやめると何回言えば」

「我夢！ちょっと待った！」女生徒の声に振り向いた我夢の目に、弁当箱を両手で捧げ持つるみなの姿が映った。るみなのはそのままずいずいと我夢に迫ってきて、弁当を我夢に押しつけた。成り行き上弁当を受け取った我夢。

「中身はロールキャベツだ！あたしはあんたのために作ってきたんじゃないんだからね！余っただけなんだから！残すなよゴルァ！んじゃ！」

ロールキャベツは我夢の好物で、幼馴染のるみなのは知っていて当然ではあった。

「...何だあいつ？」

「俺の分は無いの？」

ずかずかと大股でその場を去るるみなの背中を眺めるしかない我夢であった。

デジタルコンバート-2

強硬な姿勢を崩さない東アジア連邦に対して日本政府は苦肉の案として、宮内庁の解体と国民の募金によって皇室を存続させる案を東アジア連邦に提示した。歩み寄りの姿勢を示した日本政府に対して東アジア連邦は受け入れられないと即答。日本軍国主義の象徴である日王を連邦法廷で裁くのが連邦人民の意志であるとした。両国関係は一層の悪化を辿っていた。その先には何が待ち構えているのだろうか？

吉祥学園放課後の美術室。美術部の面々が雑談しながらそれぞれの作品に向かっていった。
「俺、デジタルコンバートしたら他の惑星とか行ってみようと思ってる。」
そう切り出したのは一足先にデジタルコンバートする予定の我夢だ。
「そうか、そういうこともできるか。」
「山口君、惑星の絵上手いもんね。」森村みらんがほほ笑みながら言った。
「上手いかどうかはいいとして。いろいろ見てみたい。」みらんに褒められてまんざらでもない我夢である。
「いつデジタルコンバートするの？」
「明後日。もう家も整理した。デジタル吉祥学園への転校手続きも済んだ。森村さんの彫刻は猫？」
「そう。猫、好きなの。」
「将来はどうするの？」
「できればムサビの彫刻科に行きたい。」
「それは大変だね。」
「だったらこんなところで木削ってないで予備校行って石膏像の木炭デッサンでもしたほうがいいんじゃないの？」
「あははーそうだよーでも三年になったら予備校行くからさ、いいんだあたし。今はこの木を削りたいの。」
「あんた真面目にやる気あんのー？」
「んー、現役は無理じゃん？」
「あははわかんないよー、ビギナーズラックってあるかもしれないしー。」
「美大受験にビギナーズラックがあるかーゴルァ！」
「あははは。」なぜかみらんは笑っていた。

翌日、我夢は登校したのち皆と一緒に授業を受け、放課後は美術室に顔を出し、自分の絵のデータを整理してから、「じゃ、お先！」とあっさり別れを告げた。みらんは少し寂しそうな表情をしていた。るみなは、「いっぺん死んでこい。」と毒を吐いた。

さらにその翌日、我夢は父親の孝明と保健所に向かった。シナプススキャン装置は現在は保健

所を中心に設置されていたが増産が開始され、間もなく役所や公民館などにも設置されることになっていた。

アナログ世界での財産はあらかじめ国に売却してしまい、といってもマンションが数千万で売れるはずもなくローンの残りからするとかなりの損をしなければならなかったが、孝明は後悔していなかった。国に売れただけまだましな方で、近いうちにその予算も無くなるはずだ。

保健所では以前の全身MRIのような形のシナプススキャン装置に、人が列を作っていた。孝明も我夢も、デジタル世界に持っていけるデジタルデータの入ったメモリデバイスを持っていた。これが新たな財産となるはずだった。

シナプススキャン自体は簡単で、全身麻酔ののち顔面と骨格のスキャンと合わせても3分ほどで済んだ。1人につき数テラバイトのデータがここからデジタル東京のサーバに転送されていくのだ。そして残った肉体は安楽死処理をされて火葬場に直行した。

次に我夢が目覚めたのは量子コンピュータの中のデジタル世界だった。自分の名前の表札がついた部屋はたった3坪ほどで、壁はポリゴンなためぺらぺら。我夢が持ってきたデジタルデータは現金と絵のデータで、自分の絵のアイコンが壁に張り付いていた。隣に孝明の部屋があった。3分早く孝明が目覚めていた。孝明の見た目はアナログ世界と全く同じだった。

「おはよう親父、どう？デジタルの心地は。」

「昔と変わらん。さて、何から手をつけようか。アバターの作成は後回しでいいな。あんなの遊び機能だ。まず住民票と戸籍の確認だ。それから二人の部屋を繋ごう。キッチンやバスルームも欲しいしな。生活物資も必要だ。」

二人は家を出た。通路の交差点に電柱のような情報端末があった。デジタル国分寺市と書いてある。そこでスキャナーに右手をかざし住民票と戸籍の確認をした二人は、買い物に出ることにした。無数の人が空を飛んでいた。移動するには通路を歩くより空を飛んだ方が楽だ。空を飛ぶのは簡単で、ただ頭でイメージすればいいだけだ。二人が宙に浮くと、家の屋根にも表札がついているのが分かった。高度を上げると、二人の家の地面の上と下に巨大な階層状にまた地面があって無数の建物が建っていた。上下を見ても何階層あるのかわからない。その階層の集合体であるタワー状のものが遠くにもいくつも見える。タワーの上下にはJRと私鉄が駅を造っていた。すでにあちこちに店の看板が浮いている。

「こりゃ迷子にならんようにしないと。」

「親父、Jマートがあるよ。あ、ドンキもある。ジョイフル本田もある。」

「こりゃ便利だ。」

二人は嬉々として買い物に飛んで行った。

デジタルコンバート-3

アナログ吉祥寺の吉祥学園美術室は放課後で、美術部員が集まっていた。その双方向テレビ仕様の黒板モニタに突然火が入ったかと思うと、そこに現れたのは山口我夢だった。

「美術部の諸君、久しぶりだね。また会えてうれしいよ。」低い声中世のアニメの悪役の真似をして我夢が喋っていた。背景には「山口」と表札のかかった家があった。空には人が飛んでいる。

「おお山口、というかデジタル山口？どうだそっちの生活は。」

「なかなか便利っす部長。何より外に出てもマスクしなくていいのが快適。」

「デジタルだからカクカクポリゴンかと思ったら違うのね。結構なめらか。」

「諫宮どうよ、俺の顔、CGなんだぜ。生身の顔と変わった？」

「全然変わってない。それと下の名前で呼べ。」

「それに、こんなこともできまーす。」

ジャンプしてくるっと回ると我夢は三毛猫に変身した。

「化け猫だ。」

「あ、いいなー。」思わず感嘆の声を上げたのは猫好きの森村みらんだ。

「いいでしょ。」猫が喋った。

「他の動物にもなれるし自分でデザインしたものにもなれるし、女の子にもなれる。」

我夢はアバターをノーマル、つまりアナログ時代の自分の姿に戻した。

「たとえばさ、壁にがーんとぶつかると」といいながら家の壁に頭をぶつける。

「おお。」

「いてー！い、いてえ。」

「あ、バカだこいつ。」

「でも怪我しなーい。病気にもならない。」

「お医者さんは商売あがったりだね。」

「腹はすくの？」

「いや？すかないよ。でもおいしいものを食べたい時には自分でおなかすいた状態にすることができる。」

「へえー。」

「夜になると眠くなる。」

「で、寝たときは夢は見るの？」

「見た。でも普段が夢みたいなものだからなあ。」

「普段が夢か。そんなもんか。」

「たとえばさ。」飛ぶ我夢。画面の視点は我夢を後ろから追いかけている。

「おお、すごい。」

「武空術だー。」

「本は図書館があるし、新作は本屋で買える。」

「小説家は仕事がありそうだね」我夢は三省堂書店の看板が浮いている本屋と図書館の上空を飛んでいた。

「テレビは？」

「テレビを買えば現実世界のテレビ局の番組がタダで見れる。近いうちにアナログ放送局はおしまいになるそうだ。あ、NHKは受信料払わないとだめみたいだけどね。デジタル放送局も各局ある。その気になれば自分で放送局立ち上げることもできそう。」

「映画は？」

「レンタルビデオもあるし映画館もある。やっぱ映画は一緒に大勢で見るのがいいよな。」

「そのへんは一緒だね。」

「ネット情報はタダで見れる。たとえば、あ、これは...」我夢の手から四角いモニタが出てくる。

「なんだそれ」

「俺が中等部にいたとき書いたブログ。」

「ひゃー見せろ見せろ」

「何々？ニコラ・テスラの世界システム？」

「ああ、好きだったんだよニコラ・テスラ。」

「誰？」

「エジソンのライバルだよ」

「世界システムって何よ」

「指向性マイクロ波ビームを高電圧で発射すると地球規模で今のネットみたいなことができるという仮説。」

「なんのことだかさっぱりだ。」

「ところで俺は東京サーバにいるけど、別サーバに移動するにはお金がかかる。でも宇宙にも行ける。」

「アナログで宇宙には行けないからなあ。」

「一千万かかるってそうじゃん。」

「デジタルなら十万で行けるよ。今度木星と土星行って来る。いいだろー！」

「木星と土星ツアーでいくら？」

「百万くらい。バイトとお年玉で五十万貯めた。あと五十万は親父から借りる。じゃ、このテレビ電話もお金がかかるのでそろそろ切るよ。」

「じゃね。」

「木星と土星から帰ってきたらまた来るよ。」

美術室の黒板モニタがまた黒くなった。

「んー、デジタルコンバートもなかなかいいかもしないネー。」

椎名かちゆ副部長が言った。

その後、我夢は木星探査機と土星探査機へ旅行に出かけた。両探査機とも量子コンピュータ搭載で、メモリや通信システムにも十分な余裕があったので、NASAがツアーを設定して参加者を募集していたのだ。両惑星では探査機の光学システムを使って惑星や衛星を間近から観察することができる。生身の人間では不可能なことがデータ人間では可能になりつつあった。

犠牲-1

東アジア連邦は精密機器の輸入品に最大400%の関税をかけると発表した。東アジア連邦の精密機器輸入は半分以上が日本からのものだったので、日本を狙い撃ちにした措置と思われた。一方で東アジア連邦は軍に招集をかけ、臨戦態勢を取りつつあった。この動きが日本に対する懲罰発言と関係するのかは不確定だったが、日本の株価は下がり、円は下落した。

東アジア連邦各地では反日デモや、日本製品不買運動、在留邦人が焼き討ちなどの被害に遭い、家族などを日本へ帰国させる動きが加速していた。

一方の日本では、一部では「東アジア連邦けしからん」という論調だったが、概ね東アジア連邦の動きを恐れているような世論だった。80年前の2010年、尖閣諸島をめぐる日中が対立した時はまだ国力が拮抗していたが、今では日本の国力は比べるまでもなかった。日本は尖閣諸島を2020年代に手放している。

アメリカやEU等が東アジア連邦に自制を求めていたが、全く効果は無かった。

「美術部の諸君。なんだ、美術室、森村しかいないの？」放課後の吉祥学園美術室の黒板モニタに現れた我夢は、美術室に森村みらんしかいないのを不審に思った。

「なんか、みんないなくなっちゃった…。」みらんのの方は気が付いたら自分しかいなかったことになんの疑問も持たなかった。

「あ、そう…。」

「あ、あのさ、木星行ってきたの？」

「うん。行ってきた。大赤班すごい迫力だった。土星も行った。」

「土星の輪とか？」

「あれは不思議なものだったよ。スポークとかあってさ、何とというか、うん、言葉では言えないというか。」

「想像できないなあ。」

「写真撮ってきた。データ送るよ。」

ドアの廊下側にかちゆが隠れていた。「切ないネー。」

東アジア連邦は、日本に最後通告と称して日本が到底のめない要求を出してきた。具体的には日本の連邦編入と連邦国内法の施行、日本国憲法の停止、日本国民の一定額以上の財産の没収、円から元への移行、自衛隊、警察の解散と連邦軍の進駐、皇室の引き渡しと連邦法廷にて平和に対する罪での裁判など。日本政府は、これは内政干渉であるとして拒否した。

これを受けて陸海空自衛隊は臨戦態勢に入った。だが内閣の防衛出動命令は、東アジア連邦を刺激するとして先送りされた。

「臨時ニュースをお送りします。 E A N、 イーストアジアネットワーク外電によると、東アジア連邦軍は寧波基地などから大艦隊が出撃、日本の南西諸島に向かう模様です。東アジア連邦政府は声明を公表しました。それによりますと、日本列島と南西諸島すなわち第一列島線はアジア大陸の大陸棚に属しており、琉球や日本は朝鮮と同じく古来より東アジアつまり中国の属国であった。日本が独立するというこの200年の間違った歴史に終止符を打つべく、また日本の覇権主義、軍国主義への懲罰として、また日本による中国侵略、朝鮮併合などへの懲罰として、東アジア連邦が目指す平和主義の観点から正義の鉄槌を日本に下す、とのことです。」

西暦2092年夏に勃発した東アジア連邦による日本への軍事的侵攻が、のちに日本戦争と呼ばれることになった戦争のはじまりだった。

背景には、米国の経済的凋落と米国内での非対称戦闘により、在日米軍の実戦部隊が本国へトランスフォーメーションしたことによって生じた安全保障上の戦力の空白と、先行したデジタルコンバートによる日本のアナログ国力の減少が見込まれたことから、東アジア連邦の日本への領土的野心を惹起したのだった。

連邦軍は戦闘機の大編隊を南西諸島に向かわせた。一方の自衛隊はもともと東アジア連邦を刺激するとして沖縄をはじめとする南西諸島への積極的軍備を禁じられ、実戦部隊を本土へ引き上げていた。この結果、南西諸島の制空権は戦わずして連邦軍のものとなった。

ニンゲンの人生というものは、例えてみれば箱庭のようなものなのかもしれない、と竹島頼舵は思考した。思考というのはとどのつまり脳内でのデジタルな化学変化であって、だから当たり前ながら頼舵は思考することもできるし自我も意識もある。

人間として普通の高校生をしている頼舵が何を今更そんなことを考えたというのも、頼舵にとっての友人、親友と言ってもいい山口我夢が生身の人間でないデジタルな存在になってしまったからで、しかしなぜかむしろ頼舵にとっては我夢の存在を近く感じる事ができたのだった。

そんな頼舵だったが、恋にも無縁ではなかった。

頼舵にとっては親友の我夢がまたみらんのことを気にしていることは感じ取れた。そのある意味恋敵の我夢がデジタル人間になってしまい、直接触れ合うことができなくなってしまったことへの負い目というものもあるのだが、それより切迫した事情が頼舵にはあった。

頼舵がみらんへ話しかけたのは放課後部活が終わってから、みんな三々五々散っていく瞬間を見計らって二人きりになった路上だった。

「森村さん、俺と付き合わない？」

「…えーと、ごめん。今は考えられない。」みらんはウインクしながら両手で頼舵を拝んだ。

「そう。」

「気を悪くしないでね。あたし、そういうの今はちょっと。」

「いや、いいんだ。」頼舵はむしろふっきれたような表情で、短い恋の終わりを自らに納得させようとしていた。

「実は俺…。」

「何？」

「いや、何でもない。」

この時敏感なみらんは何か感じていたかもしれない。

森村家は小平市の西武多摩湖線沿いに建つ平均的なマンションの4階だった。みらんの父親は会社員だが一人っ子とはいえ子供に恵まれたことで、その当時の日本では幸せな家庭であるといえた。それだけ子供は社会にとって貴重な存在だったのだ。

家族が揃った土曜日の午後、みらんと両親はリビングで双方向テレビを見ていた。テレビでは東アジア連邦が遂に日本に対して牙をむいたと特別報道番組のキャスターが悲壮な面持ちで喋っていた。沖縄にいるレポーターが那覇市民の様子をレポートしている。デジタルコンバートして沖縄サーバに入っている沖縄県民はわれ先に九州各県のサーバに避難していた。そもいかないうアナログ人間の沖縄県民は本土へ避難しようとする人、デジタルコンバートしようとする人、事態を諦観している人など様々だった。自衛隊は市街地での戦闘を避けるため、どうやら南西諸島を捨てて本土に下がるようで、人や荷物を満載した輸送艦が港を出る様子が写されていた。

「何で21世紀末にもなって侵略戦争なんだ？世界史の教科書か。今は19世紀か？ふざけろよ！」みらんの父親がぶ然として言った。

「お父さん。」

「あなた、戦争になったら食料を買いだめしといたほうがいいでしょうか。」

「そうだな。母さん。今のうちにエコスに行っておこう。」

エコスは森村家の北側に2000年頃に開店した古いスーパーで、2050年代に建物を建て替え、現在では食料品に加え生活雑貨も揃えるこの地域では大きな部類の商業施設だ。

「みらんは家で待ってなさい。」

「うん。」

ことここにたって東アジア連邦という国家はその牙を剥いて日本に襲いかかった。連邦軍は東風61、71及び最新の鉛筆形をしたステルス弾道弾東風81といった戦略弾道弾数百発の飽和攻撃を日本に仕掛けた。

日本海にはこれあるを想定して、海上自衛隊の護衛艦ながと、むつ、やましろ、ふそうなどが展開しており、スタンダードSM11による弾道弾迎撃を実行した。日米共同開発のSM11は20世紀から続くスタンダードミサイルの最新バージョンで、高度2000キロまでの迎撃能力

があり、一発のミサイルに32個のキネティック弾頭が装備されていて、各弾頭はネットワーク化されてマルチスタティックレーダーとして作用する、対ステルスミサイルだった。飽和攻撃に対抗するためにこのミサイルを各艦ありったけ放出した。

結果、弾道弾の半数は宇宙空間でデブリと化した。

続いて自衛隊各基地に装備されている防空隊のパトリオットPAC5と62式レールガン対空システムが火を噴き、大気圏に突入してくる弾頭を迎撃した。

しかし、それでも撃ち漏らした数十発が市街地に着弾した。これらは全て非核弾頭だったが数百人の死者と数兆円規模の資産被害が出た。これらの弾頭の中にBC兵器やダーティーボムは無かったが、これは東アジア連邦による日本への侵略意図と無関係ではなかった。日本国民は恐怖した。

市内の行政スピーカーが一斉に放送を始めた。

「こちらは小平市役所です。ただいま弾道弾警報が出されました。市民の皆さんは落ち着いて対処してください。」

落ち着いて対処といっても、ミサイル相手に何をしたらいいのか。逃げる場所も無いのだ。森村みらんは途方に暮れた。両親は出かけたままだったし、双方向テレビの臨時ニュースもなんだかリアル感に乏しかった。

突然の轟音と大地震のような震動にみらんは悲鳴を上げて脅えた。リビングの棚の上の小物がけたたましい音を立てて飛んだ。ガラスの割れる音。震動が収まり気が付くとリビングは足の踏み場も無い有様だった。

「何？」

南に面した窓から外を見ると一面砂埃が舞い上がり、それが収まると車が引っくり返っているのが見えた。双方向テレビが全国各所で弾着の様態とニュース速報を流していた。それが即座に報道フロアからの生中継になった。

「速報です。東アジア連邦からのミサイル攻撃によって首都圏では各地にミサイルが飛来着弾し、被害が出ているようです。」

みらんは弾かれるように玄関に向かって走り、マスクをするのも忘れてドアを開けた。目の前にははずのスーパーエコスは跡かたも無くなり、中心は土壁のクレーターに、周辺はがれきの山になっていた。

「ああああ！」みらんは顔面を両手で押さえ、くず折れた。マンションのスーパーに面した壁面には飛んできたがれきが無数に突き刺さり、ガラスは全て割れていた。

隣近所から住人達が恐る恐る顔を出した。

やがてみらんは気が付いたように起き上がると、慌てて走り出した。「お父さん！お母さん！」家に鍵をかけるのも忘れ、エレベータに向かったがエレベータは地震モードになっていて止まっていた。階段を駆け降りる。

道路は建物の破片や引っくり返った車。その車に押しつぶされている人もいる。息をきらし、スーパーエコスの敷地に駆け込んだみらんだったが、そこにはがれきの山しかなかった。足元

はアスファルトの駐車場のはずだったがアスファルトはひび割れ捲り上がり、何の物だかわからない細かい破片で足の踏み場もないほどだった。

はじめぽつりぽつりとしか動く人はいなかったがやがて野次馬でいっぱいになった。警察や消防のサイレンが聞こえてくる。

「はい下がってください！下がってください！」消防士が小型の搜索ロボットをがれきの隙間から中へ入れて人間の搜索を始めた。この時代の日本人は全て右手の甲にICタグが埋め込まれているので、レスキューの安否確認は簡単になった。

やがて野次馬たちは協力して消防隊員の指示であちこちでがれきの山を壊しにかかった。みらんもその中に入った。

何かしていないと頭がおかしくなってしまうそうだった。

時折、人間やその一部ががれきの中から運び出されてくる。それはとてもシュールな光景だった。生存者が発見されると歓声が起る。ストレッチャーに乗せられ、運ばれていく生存者に追いつくようにみらんはその顔を見たが、両親の顔ではなかった。スタンバイしていた救急車がサイレンを鳴らして走り出す。いつの間にか上空に報道のヘリが乱舞していた。そのころにはパワードスーツなどの重機も入って能率は良くなってきた。

みらんは、手近な消防隊員を捕まえて聞いた。

「生存者の中に森村悠馬と森村美優の名前はありますか。」

「あー、ここではわかりません。情報は署の対策センターで管理してますから。」

「じゃあ、そこへ行けば教えてくれるんですか？」

「個人で行っても情報開示はできません。生存者と死者はしかるべき時に発表されます。」

「しかるべき時っていつですか！」

「私は下っ端なのでわかりません。もう第一報は発表されているかもしれません。」

「そうですか。」

日が暮れてきた。埃にまみれて疲れ果てたみらんは座り込んで携帯ツールでテレビを見てみた。

地元の情報が優先的に流れるローカルテレビのワンセグチャンネルに合わせてみる。

「こちらはスーパーエコス小平店へのミサイル攻撃にて亡くなった方々が安置されている小平第六小学校体育館です。」

「六小だ！」

その小学校はみらんの出身校で、スーパーエコスからその小学校の名前の付いた通りを西へ数百メートルの位置にある。

テレビには生存者死者情報の検索ボタンもあったがそれを押す勇気はみらんにはなかった。

立ち上がったみらんだが、小学校への足は重かった。しかし自分の目で確認しなくてはいけないという義務感だけが彼女の足を動かしていた。パン工場、タイヤ工場の社宅を右手に見ながらかつて通いなれた小学校時代の通学路を、虚ろな足取りで進むと右手に小学校が見えてくる。

体育館の入り口まで来ると、中から悲痛な叫び声や泣き声が聞こえてくる。その声にたじろいだみらんは思わずしゃがみ込んだ。そこにいた警官が「大丈夫ですか」と駆け寄ってきた。かうじて気を取り直したみらんは立ち上がり、気丈に尋ねた。

「森村悠馬と森村美優の娘です。私の両親はここにいますか？」

「ちょっと待ってください。」

警官はツールを操作して検索すると答えはすぐに出た。

「お嬢さん。…中へどうぞ。気確かに。」

民生委員のボランティアに促されて体育館に入る。線香の匂いがする。棺が並んでいる。

棺にはそれぞれ名前が書かれていた。死体の名前はI C タグですぐわかる。

森村悠馬と書かれた棺の蓋を開けると顔が無かった。埃にまみれた右手首しか無かった。腕や胴体は爆発でどこかへ吹き飛んでしまったのだろう。母の名前の棺も似たようなものだった。ついさっきまで元気に話していた両親が変わり果てた姿で、しかも体の一部しか残らなかったとは。

みらんは、あまりのことに涙も出ず呆然とその場に立ち尽くした。

ついに東アジア連邦によって日本の国土に実害が及んだことについて、日本では各メディアが自衛隊の能力不足を糾弾した。一方で東アジア連邦許すまじという論調は一部にとどまった。

日本政府は国民に平静を保つよう呼びかけた。

吉祥寺の吉祥学園美術部では近くに落ちたミサイルの話でもちきりだった。

「小平市に落ちこちたミサイルの被害者検索してたらさ、これ森村さんの家族じゃない？」

最初に気付いたのは部長の霧島獅子だった。

「そういえばあの子の最寄り駅、青梅街道だったっけ。ミサイルが落ちた所に近いよ。」るみなが思い出したように言った。

「それで森村さんこないのか。」当の森村みらんに告白してふられたばかりの頼舵が心配そうに言った。

「誰かケータイの番号知らないか？」

「かけてみるヨ。」

「…。」

「どう？」

「電源が切れてる。」

「んー、誰か家に行った方がいいんじゃないかな？」

「あたし行くよ。うち近いし。今日にでも言ってくる。」

その日学校帰りに直接国分寺から西武多摩湖線に乗った諫宮るみは二つ目の青梅街道駅で降りた。西武多摩湖線はJR中央線のような新交通システムは導入されておらず、従来型の電車路線だ。爆発の破片が線路の高架軌道に無数に突き刺さり、強度が落ちたため、多摩湖線は青梅街道駅で折り返し運転をしていた。線路に沿った萩山通りを歩くと、ところどころにミサイルの爆発で飛んできた破片の跡がある。家のガラスが割れたり瓦が飛んだり家が半壊したりしている。

みらの住んでいるマンションはすぐ分かった。マンションはかしがってこそいなものの北側は無数の破片が突き刺さり建っているのがやっとならった有様だ。

マンションの玄関はオートロックになっていて、中から開けてもらわないと入れない。

るみは森村と書かれた呼び鈴を押した。反応が無い。続けて押す。何度も押す。

「…はい。」

「諫宮だよ。みんな心配してるよ。開けて。」

「ごめんなさい。」

それからるみながどう話しかけてもみらは「ごめんなさい」しか言わず、一方的に切ってしまった。

結局るみはみらんに会えなかった。

美術室には陰鬱な空気が漂っていた。

「森村さん玄関あけてくれなかった。」

「やっぱ両親ともいないのか？」

「多分。」

「両親とも同時に亡くなったんじゃショックだよな。」

「んー。親戚とかいないのかナ。」

「先生に言ったほうがいいんじゃないの？」

「担任だれよ。」

「話だけしてみるけどさ。オートロック開けないんじゃ同じだよな。」

「んー。山口我夢にも知らせてやった方がいいと思うヨ。」

「うん。そうだね。あたしからあいつにメール出しとくよ。」

【るみな発我夢へ】

森村さんの両親、ミサイルの爆発で亡くなったんだって。一応知らせておこうと思って。

【我夢発るみなへ】

まじで？親戚とかいないの？

【るみな発我夢へ】

わからない。私マンションに行ったけど、開けてくれなかったし。

揚陸艦を主力とする東アジア連邦軍の大艦隊が遂に南西諸島の日本領海内に入った。海上自衛隊と海上保安庁は通常の領海侵犯対処を自粛して、本土へ退却した。

「ネットの速報見た？ミサイル攻撃で自衛隊が200人死んだ。民間人は900人だって。」

「遂に沖縄に連邦軍が来たっていうし。」

「吉祥学園にもいつミサイルが飛んでくるかわかんないよな。」

「逃げよう！ねえ早く逃げようよ！」

「どこに！」

「北海道とかさあ！」

「それよりデジタルコンバートだろ！」

日本国民はわれ先にデジタルの世界へ逃げようとしてシナプススキャンの申し込みが殺到、一部ではパニックの様相を呈してきた。吉祥学園に限らず、全国各地のアナログ社会で学校や会社が機能しなくなってきた。

東アジア連邦軍は、ロボット兵士を主力とする陸軍、海軍歩兵隊が遂に沖縄本島に着上陸した。自衛隊は交戦せず、各駐屯地で隊員が白旗を掲げた。東アジア連邦は戦わずして南西諸島を手

に入れた。日本にとっては南西諸島で戦闘による一般人の死者が出なかったことだけが唯一の幸이었다。

戦争の恐怖から逃れるためデジタルコンバートが進んだせいで、日本のアナログ人口は半分以下になった。吉祥学園の美術部は出席人員が三分の一程度になってしまった。

閑散とした美術室を眺めて霧島部長は言った。

「さみしくなったなあ。」

「んー。しょうがないネ。うちも明日デジタルコンバートするヨ。」

「ういーっす。」竹島頼舵が入ってきた。その姿はいつもの制服と違う。

「あ、バイクメン。」

「バイクメンはやめろ。」

「竹島、その格好なんだ。」

「自衛隊の制服？コスプレ？」頼舵が着ていたのは航空自衛隊の制服だった。

「似合うよバイクメン」るみながはやし立てた。

「戦争だからって高校生がそれはないだろう。」

「みんなごめん。黙ってたけど、俺、自衛隊の作ったロボットなんだ。」

あまりのことに美術室が一瞬静まり返った。

「何だってー！」

「うそだろ。」

「今日、招集された。」

「ショウシュウって何？」

「つまり戦争に行くことになった。今日はさよならを言いに来た。今まで楽しかった。」

「おいまじかよ」

「ごめん。マジです。」

「そんな、嘘でしょ！」

「お前がロボットだなんて信じないぞ。」

「連絡先のメルアドくらい教えろよ。」

「ごめん。防衛機密なんだ。」

「なんだそれ。」

「戦争に行くなら、死んだ森村さんの両親の仇をとってくれ。」

「まかせとけ。ありがとう。みんな、さようなら。」

頼舵はそれだけ言うと美術室を出て行った。残されたみんなはただぼかんとしていた。

「みんなびっくりしているところ、なんだけど。」

霧島部長が切りだした。

「学園から通達があつて。今日で部活は解散だそうだ。本日をもって吉祥学園美術部は解散する。」

がたん、と椅子をひっくり返してるみなが立ち上がった。

「んなバカな。」るみは自分で言っておいて唾然としていた。

【るみな発我夢へ】

頼舵のことなんだけど、聞いた？あいつ、本当は人間じゃなかったんだ。自衛隊のロボットだったんだ。今日戦争に行くってみんなにさよならしに美術室に来た。

【我夢発るみなへ】

信じられない。バイクメンの連絡先とか知らない？

【るみな発我夢へ】

連絡先は防衛機密だってさ。

【我夢発るみなへ】

じゃあこっちから連絡とれないってことか。酷いな。

【るみな発我夢へ】

それと美術部が解散した。霧島部長が言ったた。

南西諸島が東アジア連邦に占領された時には沖縄サーバの中の日本人はほぼ全員本土のサーバに避難してからっぽだった。それから連邦軍は沖縄サーバを本土から切り離し、琉球共和国サーバと名前を変え、大陸のサーバと連結した。すぐさま大陸から漢民族の大量のデジタル移民がやってきた。

一方アナログ市民達には過酷な運命が待っていた。

連邦軍の上級士官が通達を出した。「相手は侵略者日本だ。何をやってもかまわない。われら民族の積年の恨みをこの際に晴らせ。」これは今回の戦争での最も醜い側面だった。

日本人に対する暴行、強姦が横行し、街の店の商品は全て強奪された。

那覇は、廃墟同然になった。

個人資産を没収され、一文無しになった日本人は強制的に大陸に送られ収容所に入れられた。

また、捕虜となった自衛隊員が見せしめに処刑されたという噂もあった。

南西諸島には漢民族の支配する臨時琉球共和国政府が樹立、東アジア連邦の傘下に入った。

それらの話はデジタルアナログ問わず日本全国に噂として広まっていった。

国連では安全保障理事会の緊急会合が開催された。

東アジア連邦はこの戦いは第二次大戦での日本の中国への侵略行為と朝鮮半島の併合への報復であり、そのためには数万人規模の一般日本人の虐殺も正当化されると主張した。

日本はこれこそが侵略であるとして東アジア連邦と真っ向から対立。

東アジア連邦と経済的従属関係にあるアフリカ諸国は東アジア連邦を支持。

アメリカは開戦前の国境線へ連邦軍が撤退しなければ日米安全保障条約に則り戦略攻撃を敢行すると主張した。

東アジア連邦と対立するインドは日本とアメリカを支持。E Cは即時停戦を主張。

結局理事会は決裂。東アジア連邦の圧力によって議長声明は出されなかった。

その当時、軍事技術的にはまだ世界一の分野が多かったアメリカ軍は即時に非核攻撃ミサイル

C S Mによって東アジア連邦の第二砲兵隊戦略基地を攻撃した。宇宙から金属弾頭の豪雨を降らせるはずだったが連邦軍の運動エネルギー迎撃システムにより無力化されてしまった。

東アジア連邦は報復措置として、宇宙空間に展開するアメリカ空軍の人工衛星を大規模攻撃した。それにはこの時代も民間利用が盛んだったスーパーGPSの衛星も含まれていた。世界中のカーナビやケータイが位置情報を入手できなくなり、各地でパニックが発生した。また、衛星システムに依存していたアメリカ軍の戦力は実質的に半減以下になってしまった。地球の衛星軌道には膨大な数のデブリが散乱した。東アジア連邦側は人工衛星測地システム超北斗の運用をしていたので、影響は少なかった。

連邦軍は引き続き日本本土への着上陸準備を進めており、釜山軍港には数十隻の揚陸艦がスタンバイしつつあった。東アジア連邦軍は日本本土への侵攻作戦に「正義の光作戦」と名前を付けていた。

一方の自衛隊はまず敵は空からやってくると読んで全国からかき集めた数百機のUAV（無人機）をネットワーク化して九州沿岸に飛ばし、カウンターステルス戦術を取った。

日本国の内閣は事ここに至ってようやく、防衛出動を命令した。

北海道は千歳に展開する航空自衛隊第2航空団第201飛行隊で、マスリーダー（ML）と呼ばれる多数機編隊長の資格を持つ原口健次郎三佐は、演習で一度だけF35ライトニングIIを撃墜した経験が自慢のイーグルドライバーだった。

2035年早春。千歳基地から愛車のレガシィで帰宅途中、睡眠不足のドライバーが運転する大型トラックが雪の残るブラインドコーナーで対向車線にはみ出してきたのに巻き込まれ頸椎を骨折する瀕死の重傷を負った。そして生死の境を彷徨い、意識回復の見込みは無いと判断され、植物人間状態で担ぎ込まれた防衛省技術研究本部先進科学研究所で当時まだ実験段階のデジタルコンバート処理がなされた。

一人のイーグルドライバーを育てるには億単位の税金がかかる。MLの資格を持つベテランならなおさらだ。国家がその頭脳を放っておくはずは無かった。

コンピュータ内に展開された原口の意識に命令が下った。

「原口健次郎三等空佐は、そのパイロットとしての知識と経験を圧縮データとして保存、有事に際してはそのデータを再展開し、将来の自衛隊の作戦行動に資するものとする。」

こうして原口健次郎三佐はデジタル人間として有事に備えて長い眠りについたのであった。

原口健次郎は、闇の中で目覚めた。

意識がだんだんはっきりしてくると、あることに思い立った。

「私の意識があるということは、日本は随分切迫しているという理解でいいのかな？」

原口は闇に向かって話しかけた。

すると、闇の中から亡霊のようにすうっと人の形が現れた。それはほどなくして原口の見慣れた航空自衛隊の制服姿になった。しかし、よく見ると制服のデザインが微妙に違うような気がする。そしてまるでスポットライトが当たっているかのように、その人物の周りだけが明るくなった。それからその人物は漸く話すことを許されたかのように静かにしかもよどみなく喋りだした。

「自分は原口三佐の覚醒と状況認識、そして機種転換訓練のためのお世話係をさせていただきます、レベル3のAI、鈴木といいます。私は人工知能なので階級はありません。」

原口は鈴木と名乗った自衛官姿の男を正面から見つめた。この男は今何と言った？ 人工知能ということは人間ではないのか？ 原口はもう何が起こっても驚かない覚悟だった。

「それはどうも、よろしく。」

「よろしくお願いします。」

鈴木は感情のこもった声で答え、続けた。

「原口三佐の考察の通り、日本は現在、国家として安全保障上危機的状況にあります。東アジア連邦軍は南西諸島を占拠し、九州に侵攻するのも時間の問題です。」

空間に立っている鈴木の横にパネルが浮かび、日本の南半分の地図が表示されると、大陸側から赤い矢印が何本も九州に伸びてきた。

「日本は政治的配慮から今まで武力行使は避けてきました。しかし政府は本土への侵攻は実力で阻止する方針です。」

「何で沖縄が取られるのを黙って見ていたんだ？」

「戦力の温存と民間人居住地での武力衝突を避けるための政治的配慮です。沖縄の部隊は可能な限り本土に撤収しました。」

「米軍だっているだろうに。」

「米軍はすでにトランスフォーメーションで沖縄から撤退しています。」

「日米安全保障条約はまだ有効なのか？」

「日米安保はやや形を変えて存続しています。日本本土には米軍基地もあります。自衛隊の本土での作戦には呼応するはずですが、米陸軍、空軍と海兵隊はほぼすべて米本土に撤収し、現在アメリカ全土で非対称戦闘中です。日本に残った戦力は米第七艦隊のみです。」

「そういう事情か…。済んだことは仕方がないとはいえ、日本政府はどうしてこんなに弱腰なんだ？」

「それは今に始まったことではありません。」

「ところで鈴木君、今は何年だ？」

「西暦2092年です。」

「そうか…。家内も親も生きてはいまい。私には子供がいなかったから、自分の子孫にも会えないな。」

「心中お察しします。」

「人工知能らしくない言葉だな。」

原口はふふと鼻で笑った。

「そうだ。君とまだ握手をしていなかった。」

「残念ながらそれは叶いません。原口三佐は現在人体のインターフェースを持っていないからです。その証拠にご自分の手足を見ることが出来ないはずです。」

原口は一瞬戸惑った。自分自身の手を見ってみるには勇気が必要だった。意を決して手を動かしてみようとすると、感覚はある。しかし鈴木の言う通りそこにあるはずの自分の手は無かった。

「これは…。」

「三佐は現在、人間の意識体データとして防衛省の量子コンピュータの中にいるのです。」

「そうか。そういうことだったな。」

原口は苦笑した。いや、苦笑したつもりになった。そして自らの立場を悟った。これでは幽霊のようなものだ。

「必要であればバーチャルの人体を用意することもできますが、現状その必要も時間も無いと思われま。三佐にはこれからパイロットとして機体と同化して飛んでいただくかなくてはなりません。イメージとしては機体に神経を伸ばし、自分の体を動かす感覚で機体をコントロールしていただくこととなります。」

「そうか。つまり私が搭乗する機体はそういう機体なわけだ。」

「はい。現代の主力戦闘機は生身の人間では高機動に人体が耐えられません。」

「そのパイロットはみんな生身の人間ではないデータ人間なわけだ。」

「その通りです。一時期無人戦闘機が主流になったのですが、プログラムされた飛行データよりも訓練を受けた人間の発想のランダムさを生かした方が戦闘には有利であるとの結論に達しました。しかしそれが分かった時には戦闘機パイロットを経験した人間は貴重な存在になっていたのです。原口三佐は今回のパイロットの中で最も古株です。」

「元イーグルドライバーとしての私の経験が生きれば良いのだが。見せてもらおうか。その機体を。」

鈴木の前側にその機体のCGが浮かび上がり、ゆっくり回転を始めた。

まるでロボットの下半身のような構造の胴体の腰にあたる部分から、後退翼が途中から前進翼になる、鷲の手羽先のような形の主翼が生えている。水平尾翼も垂直尾翼も無い。もちろん全体は空力的に洗練されたなめらかな形をしている。

「三菱F5戦闘機です。2075年に正式採用されました。米空軍のF82戦闘機をベースに日本仕様で再設計されたものです。」

「F2と同じような事情だな。しかし、これはナットクラッカー方式というか、胴体が途中から折れるのか？」

「はい、その通りです。過去考案された屈曲胴方式のVTOLをさらに発展させたものです。双発の各エンジンプロップは高機動中に縦にそれぞれ独自に360度回転することができます。ノズルも三次元可変です。」

原口はその戦闘機の設計者の発想の突飛さに驚いた。こんな構造を実現するにはとんでもない強度の構造材が必要なはずだ。

「機体は75Gまで耐えられます。」

もちろん生身の人体が耐えられる重力加速度ではない。

F5戦闘機のマニューバーの立体映像が宙に投影された。エンジンプロップをくるくる回転させながらF5は高速飛行からの空中停止やその逆、あるいは瞬時に鋭角な旋回をしてのけた。まるでロボットが空中でダンスを踊っているようだった。原口にはそれが実写なのかCGなのか見分けがつかなかった。

「これは実写の映像です。」

「まるでUFOのようなマニューバーだな。」

「原口三佐の脳内に直接機体のデータを送ります。よろしいですか？」

「そんなことが可能…、なんだな。たのむ。」

原口の脳内に三菱F5戦闘機の仕様データが流れ込んできた。

「ステルス性能は？」

「正面のRCSは昆虫程度です。ビジュアルステルス、いわゆる光学迷彩も可能です。ただし有効な方角は限られます。排気熱の赤外線は半減程度です。また、マルチスタティックレーダーをはじめとするカウンターステルス技術の発達によって戦闘機による戦術は二十一世紀初頭から大きく変化しました。それにも適応してもらう必要があります。」

「運用は全てVTOLが前提で滑走路は必要無しか。で、これが今の空自に築城の304空と百里の305空の二個飛行隊合計たったの24機…。虎の子だな。」

「原口三佐は304空に所属することになります。」

「私のいた201空はもう無いのか。…残念だ。」

「現在使用可能なUAVを日本中からかき集めてネットワーク化し、九州上空に飛ばしています。一方の東アジア連邦軍の航空装備データです。」

鈴木が自衛隊、在日米軍と東アジア連邦軍のデータを比較して見せた。

「圧倒的な数だな。主力はJ50が約200機か。性能もあなどれない。これが国力の差というやつか。…私は一度死んだ身だ。ゼロ戦のパイロットがイーグルに乗るようなものだが、意地を見せてやるさ。しかし、ここまでなる前に私を起こした方がよかつたんじゃないか？」

「空自戦闘機パイロットの冷凍人格の解凍には内閣の防衛出動命令が必要です。」

「これだからこの国は…。」

「でも間に合います。三佐の機種転換シミュレーションは390倍速の高速演算で行われます。24時間以内にコンバットレディに入れます。」

「実機を使わずに24時間でCRか。データ人間ならではだな。すごい時代になったもんだ。ちなみに鈴木君、きみの下の名前は？」

「ありません。しいて言えば鈴木0025です。」

「そうか。悪かったな。」

「は？」鈴木は、謝られて意外だという顔をした。

その顔は何となく滑稽な表情だった。

「もうひとつ。君から私はどう見える？」

「それは…、言葉では言い表せません。イメージをデータ転送することは出来ますが。」

「いや、それには及ばないよ。見たくない。」

「原口三佐とコンビを組むいわゆる後席を紹介します。彼は現在最高のレベル5のAIです。極めて人間に近い感情と判断力を持ち、またデジタルAIであるがゆえに反応速度はコンピュータ並みです。」

鈴木の際に空自の制服を着た若者が現れた。

「あ、初めまして原口三佐。竹島頼舵です。よろしくお願いします。自衛官の経験はありません。勉強中です。」

たしかに人間っぽいがこんな若造の素人で大丈夫か？

「原口だ。よろしく。TACネームはレイブんだ。普段も機上もレイブンと呼んでくれればいい。」

「たっくねーむって何ですか？」

そこから教える必要があるかー。

「あー。空自でのパイロットのあだ名みたいなもんだ。コールサインともちがうな、交信の時に使うあだ名だ。」

「じゃ、俺はバイクメンでお願いします。」

「ははははは、名前がライダだからか？まあいい。」

「高校生やってた頃の親友が付けてくれたあだ名です。何で複数形なのかわかりませんが。」

「高校生！、竹島君、君、いくつだ？」

「設定では16歳です。作られた時の年齢が12歳、それから中学に入って。」

「16！中学！何で人工知能が学校に通うんだ？体はどうした。」

「体は先進科学研究所が作ったロボット、というか有機アンドロイドというか、陸自の普通科用次世代ロボット開発のテストも兼ねていたんです。外見はほぼ人間です。学校に通ったのは人間として人間と交流することでさらに人間らしさを学ぶためです。先進型AIの研究のためだそうです。」

「そうか。そんな研究もしていたのか。私をデジタルコンバートしたのも60年前の先進科学研究所だ。ところで遠慮なく聞かせてもらおうが俺達には国の虎の子のF5戦闘機が任されることになっている。16歳の高校生が大丈夫か？」

「知識としてはF5戦闘機のデータは入ってます。これからレイブンと実際の飛行訓練をすることで慣れると思います。大丈夫かということ言えばレイブンこそ大丈夫ですか？だってレイブンが乗ってた戦闘機は60年前の戦闘機でしょう？いや原型機は120年前初飛行じゃないですか。俺に言わせりゃ中世ですよ。」

「言ってくれるじゃないかバイクメン。俺の飛行訓練は厳しいぞ。」

「受けて立ちますよ。」

「頼もしいじゃないか。気に入った。」

原口はいわゆる航空機シミュレーターには乗ったことがあったが、今回のこれは全く実機そのものだった。飛行機を操るインタフェースにはすぐ慣れた。仮想空間での飛行訓練は実機と全く変わらず、空の色や雲に至るまで現実の通りで、Gまでそのままに再現してみせた。ただし体に対する影響まで再現すると過大なGに精神が耐えられないのでデジタル人間にとって実感的には実際の10分の1Gといったところで押さえられているようだ。

バイクメンこと竹島少年は勉強熱心で、急速に原口の片腕として成長していった。

「バイクメン、坂井三郎って人物、知ってるか？」訓練飛行の合間、ブリーフィングの前に原口は頼舵に尋ねてみた。

「え、検索していいですか？」デジタル人間はいつでもネットの膨大な情報にアクセスできる。

「駄目。」

「いやー、知らないです。」

「第二次大戦の時の海軍のエースパイロットだ。別名大空のサムライ。」

「へえー、どんな人ですか？」

「レシプロ戦闘機時代のエースで、日頃の鍛練を欠かさず、空戦に万全の態勢で挑み、スランプからも学習し、あらゆる空戦から生きて帰ってきた。俺の時代の空自の戦闘機パイロットでは知らない者はいない。」

「へえー。」

「俺の時代の空自では彼にならって日常生活を全て空戦に捧げて初めて実戦で生きて帰ってこれるパイロットになれると言われていた。なんたって昼間に星が見えたらしい。」

「♪目の奥で円を描き、幻を追い払え。合ってます？」

「なんだそれ。まあ空戦とはそういうストイックな世界だよ。それは誰かの歌？」

「坂本龍一ですって。俺の高校の先輩が教えてくれました。レイブンの時代の人なら知ってるかと思って。」

「音楽家の坂本龍一は名前なら知ってるよ。俺より随分年上だけどな。」

やがて戦闘訓練は過酷を極めた。ブリーフィング、飛行、ブリーフィングの連続。AIである頼舵はともかく元々人間の原口には精神的疲労も蓄積してくる。睡眠欲は機械的にカットできるが集中力が持つかどうかは別物だ。

そして状況の設定も実際に合わせて苛烈なものとなっていく。一対一なら先手を打てば有利だが一対多ではミサイルを発射した時点で正体がばれ、集中攻撃を受けて撃墜されてしまうことが多い。そんな状況でも国の虎の子のF5は生きて還らなければならない。

原口は思った。かの坂井三郎だったらこんな場合どうしただろうかと。

F5の対G限界が75Gとはいっても、空対空ミサイルの方がどうしても機動性は良い。複数

のミサイルにロックオンされた場合どう回避するかは、そのミサイルのアルゴリズムを解析して裏をかく必要がある。アルゴリズム解析は頼舵の機能が重宝する一幕だ。

「レイブン、今の自衛隊の全装備って確認したことありますか？」

「いや、無い。というか俺のような浦島太郎には理解できないよ。」

「そうですか。陸海空それぞれ正面装備バックアップありまして、俺の存在もデータに入っていたんですが、俺を作った先進科学研究所がほかに何を作っているか調べてみたくなりまして。」

「ほう、それで何か見つけたのか？」

「分類としては陸自に入るみたいなんですが、その中でK装備ってのがあるんです。詳細を見てもようと思ったらアクセスできないんですよ。何のことだと思いますか？」

「Kねえ。決戦？回天？」

「回天ってなんですか。」

「昔の言葉で戦況をひっくり返すというような意味だ。」

「じゃあK装備が自衛隊の最終兵器ということですかね？」

「核を装備できない日本の切り札の可能性はあるが。ただの何かの軽装備かもしれんぞ。」

「うーん、一発逆転できないかと思ったんですけどね。このままじゃ何と言うか。じり貧？」

「それ以上言うな。俺達には与り知らんことだ。」

原口と頼舵のコンビがコンバットレディに入ると、連邦軍の「正義の光作戦」が発動するのとほぼ同時だった。半島の海軍基地を揚陸艦を中心とする大艦隊が出港し、空では最新のJ50戦闘機200機を全面に押し立てて侵攻してきた。自衛隊はF5戦闘機24機で迎撃した。ここに世界初の第七世代戦闘機同士の空中戦が生起した。

対馬海峡上空ではミサイルが飛び交っていた。双方の戦闘機は自ら電波を発信することなく後方のAWACSからロックオン情報を受け取りミサイルを発射した。ステルス戦闘機とはいえ全ての方向に電波を反射しないわけではない。そのためあらかじめあちこちにレーダー電波の受信装置付きのUAV（無人機）を飛ばしておき、ネットワーク化してAWACSで解析することでステルス機を見つけることが出来る。UAVは一般に低速なので、超音速侵攻能力を持つ戦闘機での作戦では守る側がやや有利と言えた。だが東アジア連邦軍は自衛隊のUAVを見つけ次第たたき落としてくる。ミサイルの備蓄は豊富なようだ。物量の差は明らかだった。自衛隊の戦闘機は低速のUAVの群れにまぎれるようにして飛んでいた。

『日本軍国主義の亡霊め！正義の力の前に滅びるがいい！我々に対して刃向うことすなわち平和への冒涇である！』連邦軍のECMが大出力で発信されていた。それは実際ECMとしてよりも宣撫放送としての役割であるらしかった。

無理やり放送を聞かされる側の原口はいらいらしていた。

「バイクメンよ。これあんまりだと思わんか？」

「俺も『日本人』ですから酷いと思います。」

「俺は自衛官だから一応過去の歴史の勉強もしたさ。でもここまで言われる筋合いは無いぞ。日本に感謝してる国だってあるのに。俺達の祖先はこんなにも恨まれるようなことをしたのかよ！」

「彼らにとって日本は悪じゃないと困るんですよきっと。」

「じゃないと自らを正当化できないか。それも酷い国だな。おっと出撃指令だ。」

築城基地のエプロンで待機していた原口機にAWACSが地上からの信号で出撃を促していた

。

「バイクメン、AWACSの位置を間違えるなよ。でないと空中で迷子になるぞ。」

「大丈夫です。」

「硬くなるな。気楽に行こう。発進シグナルを出せ。」

「了解。」

原口機は簡単に垂直に飛び上がり、そのまま高度一万メートル付近まで軽々と上昇した。AWACSにレーザー通信を送ると交信が成立する。対馬海峡への展開指令を受け取ると目立たないように亜音速で前進した。指示されたポイントでは自軍のUAVがランダムに飛び交っていた。一見無秩序に見える航跡はしたたかに計算されたステルス機への罠だ。

そして敵はすぐに現れた。

「AWACSより入電！J50の二機編隊です！2時の方向、距離55000、高度12000。マック3。」

「よーし向こうはまだこっちに気づいてないな。FOX1アタック！」

「ターゲットインサイト、ロックオン情報ダウンロードよし、撃ちます！」

「敵が撃った！こっちの正体がばれたぞ！全弾命中！退避！」

原口機は踵を返して一旦後方に下がる。それを追いつくようにしてミサイルが飛んでくる。

「レイブン、回避シーケンス、1コンマ05秒後にベクトル170、60度へ！」

「了解！」

「光学迷彩！」

70Gを超える重力加速度の中で原口機がかろうじて敵弾をかわす。

前線がじりじりと九州本土側に後退していた。すでに対馬は敵の制空権内だ。前方で善戦むなしくUAVが次々と撃墜されていった。

「あのUAV、みんなAI積んでるんですね。」

「バイクメンにとっては同類か。」

「ええ、戦友です。」

原口機は命令により一旦本土上空まで退避した。数に勝る連邦軍は正面だけでなく側面突破も図ろうとしているようで、五島列島上空でも空中戦が始まっていた。

「レイブン、AWACSから長崎にまわれと言ってきています。」

「了解。このままでは戦線に穴が開くか。」

超音速で西に向かうと前方で多数の爆発反応があった。

「IRSTに多数感有り、10時の方向から1時の方向、高度8000から10000、マック3。数15以上」

「網を突破した敵だ！叩き落とすぞ！FOX1アタック。」

「全部行きます！」

「よし、撃て！」

原口機は本体腹のウェポンベイを開くと積んでいた空対空ミサイルを全部ばらまいた。ロックオンはミサイルを発射してから行う。

ミサイル達が急激な旋回をして目標に向かう。

「アルファ、ベータ撃墜、ガンマは外した、デルタ撃墜…。」

連邦軍機から多数のミサイルが原口機に覆いかぶさるように向かってくる。

「叩き落とす！」

原口機は機首のレールガンを連射した。空中で爆発が相次ぐ。しかしプールしたエネルギーが尽きるとレールガンは使えなくなる。

「光学迷彩！」

それでも数発のミサイルが原口機に迫ってくる。

「チャフフレア！」

いまどきのミサイルは欺瞞措置を掻い潜るのはお手の物だった。命中は避けられそうにない。

「全部右舷ブロックに当てる！」

「了解。」

原口の神業的なマニューバーでミサイルを右舷に集中させて受けたが左舷にも被害が出た。右エンジンプロックと右主翼を失い左エンジンも出力が低下した。原口機は空中分解しながら大空にパーツをばらまいた。

「バイクメン、通信システムは生きてるか？」

「駄目です。」

「じゃあ帰れない。これで終わりだな」

「いや、ここは本土の陸地の上です。味方が墜落した機体のデータを拾ってくれば生き残れますよ。」

「そこは楽観的にいこう。俺達は良くやったよ。」

「そうですね。帰還できれば俺たちエースだったんですけどね。」

「バイクメン、お前の人生って何だったと思う？」

「人間できてよかったですよ。我夢っていう親友がいたんです。もうデジタルコンバートしてるんですけどね。」

「それはよかったな。」

原口機はなおも分解しながら墜ちていった。

航空自衛隊のF5戦闘機部隊は善戦したがいかんせん敵の数が多すぎた。各所で戦線が崩壊

した。連邦軍のJ50戦闘機が九州本土に殺到した。自衛隊各基地では対空部隊がスタンバイしたが、J50戦闘機の群れは自衛隊基地には目もくれず、九州各県のサーバに空爆を実行、デジタル世界に避難していた九州各県のデジタル人格数百万人が消去されてしまった。

西日本のサーバのデジタル人間は東日本、海外のサーバへの疎開を始めた。

東アジア連邦軍は散発的に非核弾道ミサイル攻撃を繰り返していた。SM11とPAC5を撃ち尽くした自衛隊にはもう効果的に防ぐ術は無かった

九州各県のサーバが物理的に破壊され、数百万人が死亡したことは日本人をさらに恐怖させた。航空自衛隊は瓦解し、日本本土の制空権は東アジア連邦軍の手に渡ったも同然だった。国を捨て、欧米海外のサーバへ疎開移住する人も増えた。

東京サーバデジタル国分寺市の山口家でもおろおろと家族会議の真っ最中だった。

家族会議と言っても二人しかいないのだが。

我夢が「うちも疎開した方がいいかなあ。」と切り出すと父親の孝明が

「東京サーバも危ないかもしれないね。しかしそうすると仕事がああ。まあ言葉は自動翻訳でなんとかなるにしてもなあ。」

「その前に日本が降伏しちゃうんじゃないか？」

「それも有りうる。」

その時ぴんぽーんと場違いなドアホンが鳴った。ドアカメラで見ると、なんと紙袋を上下ひっくり返して足が生えているアバターだった。

「かわいいお客さんだ。」

「ごめんください。山口我夢さんいらっしゃいますか。」紙袋がごそごそしながら言った。

「はいはい、おりますおります。」

「市ヶ谷から来ました浜崎といいます。山口我夢さんに用事があるのですが。」

玄関を開けると紙袋がよちよち歩いて家に入ってきた。

「本来の姿で街中を歩くと目立つもので、すみません。」言うなりくるっと回ると自衛隊の制服の士官になった。

「自衛隊の方ですか。俺に何の用事ですか？」

浜崎は我夢に名刺を差し出した。受け取ると「陸上自衛隊Kプロジェクト 浜崎二尉」とある。

「Kプロジェクト？」

「我々はこの戦局をひっくり返すための最終兵器、K装備を完成させました。」

「K装備？」

「地球の電離層を使った指向性マイクロ波ビームの増幅現象というアイデアはきみのブログからいただいたものだ。」

「そんな、あれは」

「それから防衛省先進科学研究所がK装備として開発し、先日北海道に完成した。」

「俺のせいなんですか？それ。」

「君のおかげだ。これで東アジア連邦軍を叩きのめすことができる。是非オブザーバーとしてK装備発動を見届けてほしい。必要な助言も欲しい。」

「わかりました。行きます。俺に責任がある。あとひとつだけ。自衛隊の人工知能ロボットの竹島頼舵を探してます。彼と連絡が取りたいです。探してもらえますか。」

「いいでしょう。では一時間後にデジタル市ヶ谷の防衛省にて。」

言うなり浜崎二尉はまた紙袋に変身した。

「それからこのことはくれぐれもご内密に。」それだけ言うと紙袋は出て行った。

「我夢。疎開どころじゃなくなっちゃったなあ。」

「何なんだ、一体。」

「それは俺のセリフだ。お前、何かブログに書いたのか？」

「ニコラ・テスラの理論を引用して説明しただけだ。」

「ニコラ・テスラねえ。普通の人には知らないよなあ。」

「臨時ニュースです。紛糾し続ける国連の緊急安全保障理事会では日本が東アジア連邦に対して遂に宣戦布告しました。今村国連大使は、これ以上の侵略行為には東アジア連邦軍の全戦力の無力化をもって当たると宣言しました。この結果生じる東アジア連邦の国民の命の損失の責任は侵略行為を行った東アジア連邦自身にあると表明。東アジア連邦の代表はこれに応じず、そんなことが可能ならやってみるがいいと突っぱねました。」

山口我夢は悩んでいた。彼が興味本位に書いたブログの内容が真実だったとしたら、それに従って造られたK装備とやらは原子爆弾や水素爆弾を超える超戦略兵器になる可能性がある。平和国家を標榜する日本がそんなものを使っていいのかという疑問。その結果失われる人命の数は万単位どころではすまないかもしれない。しかしブログの内容が偽りだったとしてもこのままでは日本は侵略され、さらに大勢の犠牲者を出し、国自体が無くなってしまいうだろう。さらに我夢は高校生に分際で非常時に国費で無用の長物を造らせた責任を問われることになるだろう。

「どっちにしても最悪だ。死神のような英雄になるか国を疲弊させた非国民になるか。」

「まるで原子爆弾みたいな話だな。成功しても失敗してもろくなもんじゃない。」父の孝明が我夢に答えた。

「でも責任は俺にあるんだよなあ。困ったな。」

「困ったなってお前、そりゃ困った事態だが、造った国の責任の方が大きいだろう。中学生がブログに何書いたって責任は問われないと思うぞ。それに侵略されてんだから国としては何かしないと犠牲者がもっと出るぞ。」

「いやそれもそうなんだけどね。俺着替えるわ。」

我夢は一張羅で新品のデジタル吉祥学園制服に一瞬で着替えた。

「我夢。俺も行こうか？」

「いや、いいよ。」

「まあうまくいこうがいくまいが、お前が心配することは無いだろうよ。国が勝手にやったことだ。責任うんぬんは無いだろう。」

「うん。ほじゃ。行ってくる。」

「気をつけてな。」

我夢は家を出ると地盤平面の中心にある縦シャフトに向かった。シャフトは上下の連絡を受

け持っている、最上地盤にはJRのデジタル国分寺駅がある。路線はアナログ時代を模していて、JRは中央線が、最下地盤にある西武のデジタル国分寺駅には国分寺線と多摩湖線が走っている。我夢は中央線の上り電車に乗った。宙を飛ぶ電車の四谷で総武線に乗り換え、市ヶ谷へ。デジタル新宿区はその経済規模にあわせてひととき巨大な円盤の集合体で、デジタル市ヶ谷はその片隅にあった。

防衛省は国の組織の中でも規模は最大なので、建物も大きい。しかし人員のほとんどが未だアナログ世界で奮闘中なので、がらんとしていた。守衛に来訪を告げ、敷地内に入る。

「Kプロジェクトの浜崎さんをお願いします。」

通された部屋は巨大プロジェクトが何面も壁に設置され、オペレータ用モニタが何列も並んだ指令室が、ガラス張りで見渡せる個室だった。部屋そのものはテーブルがあるだけの小会議室といった趣きで、指令室に向かった壁が広いガラス張りになっている。指令室の喧騒はこちらには聞こえてこない。まるでドーム球場の来賓室みたいだと我夢は思った。

「やあ、こんにちは。自分が作戦の間中、山口君の相手をします。」

浜崎二尉は当たり前ながら制服姿で現れた。

「こんにちは。で、さっきの竹島頼舵の件ですが。」

「彼は先の九州防空戦で戦闘機に搭乗して出撃、撃墜されました。」

「頼舵が死んだ…？本当ですか。」

「事実です。」

「そうですか。」

「今度は俺の番だ…。」

「ひとつ聞きたいことがあります。」

「何ですか？」

「本当に日本にその覚悟があるんですか？」

「覚悟とは？」

「核兵器を超える超兵器を史上初めて使用する覚悟ですよ。」

「今使わなくてどうする。侵略軍は間もなく博多に押し寄せる。」

「核兵器を初めて使ったアメリカのように、孫子の代まで恨まれます。第二次大戦の侵略行為なんか吹き飛びます。」

「K装備はあくまで軍事施設と艦船に対して使用します。民間人の損害は最小限で済む。広島や長崎とは同列ではない。」

「憲法との兼ね合いはどうするんです。」

「それは解釈次第です。日本政府はこれ以上の侵略行為は絶対に許さない。それと山口君。第二次大戦の真珠湾攻撃は民間人に被害はほとんど無かった。可能な限り卑怯なことはしなかった。それがなぜあれだけだまし討ちだ卑怯だと叩かれたか。一方の連合軍が日本の民間人を原爆や空襲で数十万人規模で虐殺したのに非難されないか、わかりますか。」

「いいえ。」

「日本が戦争に負けたからだ。戦争はどんなことをしても勝たなければならない。それが第二次大戦に負けた日本にとっての最大の教訓だ。正義とか悪とかそういうレベルの話ではない。戦争

は勝たなければいけないのだ。」

「それがこれからのデジタル世界の中での日本の地位にも影響すると？」

「もちろんそれもあります。」

それでも我夢にはふんぎりがつかなかった。何だろう、何かすつきりしない。

「どちらにしても、山口君がイエスと言わなくともK装備は発動する。」

「…そうでしょうね。俺はただの民間人です。こんなところに入れてだけでもありがたいことです。」

「君は賢いな。その通りだ。しかし顔には違う意見が書いてあるように見えるが。まあいい。」

「はあ。」

「まず、K装備発動の最大の問題は何だと思う？」

「起動電力の規模でしょう。日本全土の全電力を回しても正しく稼働するとはかぎらない。」

「その通りだ。一万分の一規模での実験は済んでいるが、実際の出力で実験するわけにもいかなのでね。」

「電力集中のための設備も完成しているんですか？」

「その工事も本体の建造と同時に進められた。各電力会社間の電力の融通は2011年の東日本大震災後に強化されたが、今回はそれをさらに進めて各電力会社の全電力を北海道に集中させることが可能になった。」

「ニコラ・テスラの世界システムを攻撃に使うとなると、最低でも一億キロワットは必要だと思います。」

「日本全国の発電量は合わせると約二億三千万キロワットになる。」

「電線が持ちますか？」

「もちろんだ。そのための工事だ。さて目標だが、まず第一に現在九州に押し寄せつつある揚陸艦とその護衛艦艇に対して。第二に東アジア連邦の核兵器、ミサイルサイロに対して。第三に東アジア連邦国防総省と各地の軍事基地。それぞれ5秒の照射を行う。」

「東アジア連邦が貯蔵している核兵器が爆発することは無いんですか？」

「ミサイルの制御回路と核爆弾の起爆装置は無力化できると予想している。その際爆発することは無い。ただ、近距離での水蒸気爆発で核物質が飛散する可能性はあるだろう。」

「それは核を装備した国にとっては自業自得でしょうかね。」

「まあそういうことだな。大事なはこの攻撃に対して核で反撃されないことだ。」

「連邦軍の潜水艦はどうするんですか？」

「重要だ。そればかりは通常兵器で潰さなきゃならん。現在海上自衛隊の潜水艦部隊がしゃかりきになって戦略原潜狩りをしているところだ。」

「トンネルに隠れているミサイルもありますよね。」

「それも重要だ。」

「それで潜水艦や核ミサイルは100パーセント叩けるんですか？」

「それは君の知らんでいいことだ。」

「そうですか。」

「さて電力のスタンバイができつつある。」

巨大プロジェクタに表示された日本列島にS T A N D - B Yの文字が多数広がっていた。プロジェクタの一つにピラミッド状の階層構造が描かれている。その最下層が緑色になっている。

そのころ東京サーバでは一斉にサイレンが鳴り響いていた。「こちらは防衛省です。非常事態宣言が発令されました。このサーバはこれより非常回路のみを残して電力の供給を一時的に停止します。この措置によって個人データに影響が出ることはありません。ただし復旧までは眠ってもらうことになります。現在全国のサーバで同じ措置が取られています。」

アナログの日本全国各地でもサイレンが鳴っていた。

国分寺市の諫宮家ではるみなが心配そうに外を眺めていた。

「こちらは東京電力です。これより防衛省からの要請により東京電力からの電力供給を一時的に停止します。住民の皆様にはご迷惑おかけいたしますがご理解ご協力お願いいたします。」

「停電だって。何だろうね。」

デジタル市ヶ谷の指令室では階層構造の二段目が緑色になった。全国の電力が北海道に集中されているようだ。

「山口君、いよいよだ。」

「…。」我夢は生唾を飲み込んだ。

階層構造がそのトップまで順々に緑色になっていく。

目標を図示するプロジェクタには対馬海峡と東アジア連邦の地図が表示され、確認された艦隊と軍事基地が表示されている。

責任者が何やら指示を出すと、センターのプロジェクタに赤色で「照射」の文字が出た。

目標の艦や軍事基地が次々に赤くなっていく。

「効果はどうか。」浜崎二尉がプロジェクタを凝視している。

我夢も意味がわからないプロジェクタの表示を必死においかけている。

博多水際絶対防衛線では普通科ロボット兵が塹壕に身を隠している。人間の士官が双眼鏡で海を見つめている。士官が上官に報告をしていた。

「水平線上にきのこ雲を多数観測。」やがて衝撃波と津波が博多を見舞った。

二億キロワット以上の出力の指向性マイクロ波ビームは地球の電離層によって捻じ曲げられさらに増幅されて、全地球上の任意のポイントに到達する。

東アジア連邦の艦船が一隻のこらず大爆発して沈没していく。

陸海空軍基地の施設や兵器が片端から水蒸気爆発を起こしていく。対空システムも全く意味をなさない。

ミサイルサイロが爆発する。核ミサイルの起爆装置が強烈なEMP効果で無力化され、水分を持った物体が水蒸気爆発を起こす。

生き残ったスパイ衛星からのリアルタイム映像がデジタル市ヶ谷に届いた。そこには無数のきのこ雲を真上から見た映像が捉えられていた。

「成功だ！」浜崎二尉が頷いた。

「ああ…。」我夢は声にならない声を出した。

東アジア連邦軍全施設、艦船に対する指向性ビーム攻撃により東アジア連邦軍は壊滅、東アジア連邦はこれ以上の軍事行動が取れなくなった。

太平洋に潜伏中の戦略原潜からは日本本土に向かってミサイルが発射されなかった。

移動式弾道ミサイルも同じく。これらは指揮系統が破壊されたためと思われた。

南西諸島には自衛隊が逆上陸を果たし、ほぼ無血で奪回に成功した。

戦争が終わった。

東アジア連邦では軍事力の空白が発生し、数日後チベット共和国が分離独立、少数民族の独立運動が激化し、治安が悪化した。以後インド軍とロシア軍を主力とする国連軍が駐屯することになる。

それから

戦争が終わって、日本全国祝賀ムードだった。各地でお祭りが行われたりして国民は平和を満喫した。あとは順調にデジタルコンバートが進めば日本は世界初の完全デジタル国家になる。

リアル国分寺市の諫宮家はデジタルコンバートの順番待ちで、でも戦争は終わったし慌てることも無いしで、のんびりとした日々を過ごしていた。

そんな諫宮家に突然山口我夢が訪れた。といっても我夢はデジタル人間なので、双方向テレビに現れた。

「あら我夢くん久しぶり、どう？デジタルの心地は。」

「お母さんご無沙汰してます。まあ普通です。るみなさんいらっしやいます？」

「はいはい、るみな一、我夢くんよ一。」

るみなは突然の我夢の来訪に驚きながら現れた。

「何、我夢、どうしたの？」

「あのさ、ちょっと頼みがある。」

「何よ。」

「森村の連絡先、教えてもらえる？」

「何であたしに聞くわけ？」

「いや、知ってるかなと思って。」

「知ってるわよ。で、それでどうすんの？」

「いや、慰めようかなと。」

「あんたバカア？あたしが直接行ってドアフォンごしに話して、全然聞いてくれなかったのに、あんたなんか話して心を開くと思うわけ？」

「いやでもなんかほら」

「なにへらへらしてんのよ！教えてあげるわよゴルア！」

「すまん。」

それから我夢は森村家に電話をかけてみた。何回鳴らしても出ない。鳴るということは電話はあるんだと理解した我夢は続けてみらんの携帯にかけてみた。電源が入っていない。コンピュータの電源も入っていないようだ。しかし双方向テレビだけ点いている！

我夢はテレビ番組に割り込むようにして森村家のテレビにいきなり現れた。

みらんはあっけにとられた様子だった。

「森村、ひさしぶり。」

「山口君…」

「森村、ひどい格好だぞ。ちゃんと風呂入って着替えてるか？」みらんは髪の毛はぼさぼさ、目の下にくまが出来、顔色も悪かった。

「…いいの。」

「早くデジタルコンバートしてこっちにこいよ。」

「…ほっといて。」

会話はそこまでしか成立しなかった。なぜならみらんがテレビの電源を切ってしまったからだ

。

モニタ越しでは想いが伝わらない。我夢にとっては選択肢は無かった。

再び諫宮家の双方向テレビに現れた我夢は、諫宮家にある介護ロボットを借りることにした。自分の肉体を安楽死処分させてしまったデジタル人間がアナログ世界に出てくるにはロボットの中に入るしかない。この時代介護ロボットは一般家庭にも入り込んで介護のサポートをする便利な機械だった。多機能でついでに家事もこなす。見かけは21世紀初頭の二足歩行ロボットにそっくりで、顔面はフェイスマスクになっていて目鼻は無い。

るみな之母は、どうせすぐにデジタルコンバートして無用になるからと介護ロボットの貸し出しを快諾したのだが。

「我夢君、どう？ちゃんと動ける？」

「すぐ慣れると思います。」我夢は合成音声機能を利用して答えた。さすがに声はもともとの声そっくりというわけにはいかない。本当は可動関節が少ないせいで少々窮屈な感じもしたのだが無理を言って借りる手前文句は言えない。

「ICタグの設定は大丈夫？」

「自分のアカウントをコピーしました。多分大丈夫でしょう。」

るみなはさっきから無口で我夢の入ったロボットを眺めている。

「諫宮。」

「るみなって言え。」

「…るみな。ごめん。森村みらんの家の場所、教えてくれ。」

「…みらんちゃんが可哀想だから教えてやるわよゴルア。」

「すまん。」

森村家のマンションの場所を聞いた我夢は早速出かけることにした。

「お母さん、お世話になりました。」

「我夢君がんばってね。」

「るみな。」

「バカ！あんたなんか、あんたなんか大っきらい！」言うなりるみなのは奥に引っ込んでしまった

。

「るみな！我夢君、うちの子、バカ娘でごめんね。」

「いえ。悪いのは俺の方ですから。」

ひさしぶりにアナログ世界に出てきた我夢は動きづらいロボットの体で国分寺駅北口を目指して歩き始めた。自分が住んでいたマンションが空き家になっている。人通りも少なく閑散とした

雰囲気、国分寺駅は電車の本数も間引きされているようだった。

西武線の改札に右手をかざし、ICタグから初乗り料金を支払ったシグナルを受け取り、多摩湖線のホームに向かう。人の少ないホームで30分待たされてロボットが運転する電車がホームに滑り込んでくる。

ここまで歩いてくるのに使いなれないロボットの体で気疲れた我夢は電車の椅子に座った。ロボットとして疲労しているわけではなかったが、人間としては座る行為はちょっと一息といった精神的休息の時間だ。

「ロボットのくせに座るんじゃないわねえ！」

突然若者が我夢ロボットに罵声を浴びせた。

「何だとコノヤロウ！俺は人間だ！」

即座に言い返した我夢に、若者はびっくりした様子でたじろいだ。

「ふん。」

我夢ロボットは腕を組もうとして失敗した。そんな機能は無い。不便な体だ。

やがて電車は折り返して運転を始めた。

車窓から眺める国分寺と小平の街はどことなくグレーがかった人の息吹が感じられない町並みで、すでに7割近くの人々がデジタルコンバートして去ってしまったことを如実に表していた。

二つ目の青梅街道駅で電車から降りた我夢は、るみなに教えてもらった通りの場所に森村家のマンションがあるのを発見した。裏手のエコス小平店跡の爆心地はまだクレーターのままで、爆発のすさまじさを物語っていた。

我夢はちょっとためらってから森村と書かれたドアフォンのボタンを押した。応答がない。ここで引き返しては何のためにここまで来たのか分からない。何度も押した。

「…はい。」蚊の鳴くような声で返事があった。

「俺だ。我夢だ。森村、開けてくれ…。」

「？」

中から外を見たカメラにはただの介護ロボットが映っている上に声は合成音声で我夢のももとの声とは違うので、みらんは戸惑っているようだ。

「ロボットだけど中身のデータは山口我夢だ。俺は人間だ。」

「山口君？」

「吉祥学園美術部の山口我夢だ。この介護ロボットは諫宮から借りた。開けてくれ。」

かしゅん、と音がしてドアのロックが外れた。

森村家の居間はミサイル爆発の震動で家財道具がちらかったままだった。みらんには片づける気力も無いのだろう。みらんが彫ったと思われる猫の置物を我夢は拾い上げた。

「お父さんとお母さんのお葬式はしたの？」

首を横に振るみらん。指差した先には二つの骨壺。

「お葬式、しなくちゃ。親戚は？」

「いるけどみんな九州だから、連絡取れない。」

「そうか。」

我夢ロボットは骨壺に向かって不器用に手を合わせた。

これから先、どうするか。

デジタルコンバートを急ぐ必要は無いだろうと我夢は判断した。

介護ロボットと少女の奇妙な同棲生活が始まった。

無口なみらんに付き添い、我夢は介護ロボットの機能を生かしてみらんの身の回りの世話をし
てやった。三度の食事を作り、掃除をし、洗濯をした。

みらんはもくもくと我夢の作った食事を食べた。

「うまい？」

「…味がしない。」

人口が減ってアナログ日本は社会が機能不全を起こしていた。社会のインフラや流通も滞り始
めていた。

まともなスーパーはやっていなかった。当初はネット通販で生活物資を仕入れていた我夢だっ
たが次第にネット通販も配達不可能になってきたので、遠く立川あたりまで買い出しに出かけたり
した。

我夢はことあるごとにみらんに自分の事を話しかけ続けた。

曰く。

「俺、実は自分の母親のことあんまり覚えてないんだ。俺の母親は俺が6歳の時に事故で死んだ
。それからずっと親父と二人暮らし。親父もへこんでたと思うけど親父はカラ元気な人でね。い
つも明るくて俺を元気づけてた。」

「俺、直接じゃないけど戦争で大勢の人を殺した。信じてもらえないかもしれないけど、俺のアイ
デアで自衛隊が秘密兵器を造ってて。それで東アジア連邦軍を壊滅させた。日本にミサイル
を撃って人を殺した連邦軍と同じことを、俺のアイデアがやった、いや、俺が殺した。」

「頼舵が実は自衛隊の人工知能だったそう。俺、あいつとは親友だと思ってた。あいつ、戦争
に行って、戦闘機に乗って撃墜されたそう。なんでこんなに大勢人が死ぬんだろうな。俺が泣
きたいよ。介護ロボットじゃ涙も出ないけどな。」

我夢は介護プログラムを使ってみらんの体調管理をしてやった。

「みらん、今日も平熱。血圧はちょっと低め。体重が落ち気味。脳波停滞。体は一応健康だけ
どちゃんと食べないと。」

周りはどんどん人間が減っていき、街は廃墟同然になってしまった。

いつまでこんなことを続けるのか。

二人で並んでテレビを見る。

テレビでは小平ローカルのチャンネルが、あと何日で放送終了だとか、どこの企業がアナログ
営業終了のお礼だとか、しまいには環境映像にテロップニュースだけといった有様になっていた

「西武鉄道は9月30日をもってアナログ世界での営業を終了させていただきます。今までのご利用、ありがとうございました。」

「電車、止まっちゃうってよ。」

「どうでもいい。そんなこと。」

「そうだみらん。せっかくだからさ。電車が止まる前に吉祥学園がどうなったか見に行ってみないか？」

「私はいい。」

「そんなこと言わずにさ。行こうぜ。」

「わかった。我夢がそんなに言うのなら行く。」

外は強風が吹き荒れていた。久しぶりに外に出た二人は空を見上げた。空には色とりどりの光のカーテンがゆらめいている。

「なんだあれ。ひょっとしてオーロラじゃん？」

「綺麗…。」

電車の間引き運転はさらに酷くなっていて、かつては森村家から30分で吉祥学園に行けたのに2時間かかった。車窓から見る町並みは全く廃墟で、人の気配が無い。電車に乗っているのも二人だけというシュールな光景だった。

吉祥寺の見慣れた町並みはゴーストタウンと化していて、店にはシャッターが下がり、住宅は雨戸を閉めていた。強風でシャッターがぼたぼた音を立てている。

吉祥学園の北校舎が崩れている。閉じた校門を乗り越えて進む。昇降口からは中に入れず、外階段で4階まで登ると美術室がミサイルの直撃を受けたのか大破していて黒板は割れ、大テーブルはひっくり返り風雨にさらされて酷い有様になっていた。

「これが私たちの美術室…。」

「酷いなこれは。」

「なんで！どうしてこんなことになっちゃったの？」介護ロボットに抱きつきみらんは涙を流した。

「みらん…。」

二人は長い間抱き合って泣いた。

エピローグ

そこはかつて東京とよばれていた街の跡。街の主だった人間達はことごとくデジタルコンバートしてしまい、かつてクルマであふれていた道の真ん中には大木が生え、野犬と化したかつての飼い犬や野良猫と化した飼い猫たちの楽園になってしまった。東京サーバそのものでさえ蔭に覆われ、守備する自衛隊の歩兵ロボットや無人戦車や対空システムだけがメンテナンスされていた。

1人の少女と1体の介護ロボットが人のいなくなった東京の街を放浪していた。彼らがかつて森村とか山口とかいった名字を持っていたことも半ば忘れてしまった。介護ロボットは太陽光発電パネルを背負い、自らの消費するエネルギーを自給していた。少女は倉庫の跡から食料の缶詰を入手して食べた。介護ロボットが少女に尋ねた。

「うまい？」

「まあまあ。」

介護ロボットに入っているデジタル人格は、少女に徐々に表情というべきものがよみがえっているのを感じていた。

教会の廃墟があった。屋根は抜け落ちてしまい壁だけになっている。それでも壁の上には十字架がそびえていた。教会の裏には畑があり、人間の牧師が耕していた。少女と介護ロボットを見つけた牧師はうれしそうに言った。

「おや珍しい、人間がやってきましたよ。あなたに幸あれ。」

「こんなところにアナログ人間が残っているとは。」

「この世界に1人でも人が残っている限り私もこの体をこのまま残そうと思ひましてね。」

「あ、そうだ。いいアイデアがある。みらん、結婚式、してもらおうよ。」

「うん。」

「しかし人とロボットの結婚というもの。」

「俺は人間です。」

「そうですか、わかりました。そうだ、準備があるので一日待ってもらえませんか。もちろんタダでやらせてもらいますよ。あなたがた、お名前は？」

「森村みらん。」

「ロボットじゃありません。山口我夢です」

「あと、パーソナルデータも教えてください。」

我夢とみらんは近くの一軒家の廃墟で一夜を明かすことにした。何と水道が生きている。

「すごいぞみらん、蛇口をひねると水が出るよ。」

「我夢、あなた、介護ロボットなんですよ？」

「いや俺は人間だよ」

「介護プログラムは残ってるんですよ？」

「ああ。」

「私をお風呂に入れて。」

「へ？だって…、へ??」

「わからない？私を洗ってって言ってるの。結婚式の前に綺麗になりたい。」

「裸を見ることになるけど、いいの？ていうか、ヤケおこしてない？」

「今のあなたなら襲ってこないでしょ。」

「なんだかなあ。」

「介護ロボットだったらお姫様だっこ得意でしょ。」

「そりゃまあ。」

夜は少女と介護ロボットは抱き合っただごした。

「ああ！センサーが足りねえ！（もっと君を感じたいのに）！」

「あたし、我夢の子供、欲しいな…。」

「今は無理だね。俺、ロボットだから。」

「嘘。俺は人間だって言った。」

翌日はスコールも雷も無く、穏やかないい天気だった。

教会にロボット達が三々五々集まってきた。介護ロボットあり、産業ロボットあり、家事ロボットあり、二足歩行型もキャタピラ型もぞろぞろとやってきた。

我夢とみらんは一体何事かと牧師に尋ねた。牧師が答える前に1体のロボットが答えた。

「やだなあ、吉祥学園美術部だよ。」

「え、みんな…？」

「おめでとう！」

「おめでとう！」

「んー、幸せだね。」

「我夢、よかったな。」

牧師がにこっと笑って二人に話しかけた。

「立会人がいないと結婚式らしくないでしょ？」

「牧師さん…。ありがとう。」みらんは泣き出した。

「検索したらすぐヒットしましたよ。お二人を探してらした人たちです。」

「我夢、おめでとう。森村さんには俺も目付けてたんだけどなあ。」

「お前、バイクメンか！」

「戦争から生きて帰ったぜ。」

二体のロボットは不器用にお互いをばんばん叩いて感情を爆発させた。

「いやてっきり撃墜されて死んだと。」

「墜落したところが陸地でラッキーだったよ。残骸からデータをサルベージしてもらえたんだ。あとで武勇伝聞かせてやるぜ。」

「ゴルァ森村みらん！我夢なんかでいいのか！」

「お前、諫宮？」

「るみなって言え！るみなって！森村みらん、我夢をやる。夫婦喧嘩するときはあたしを呼べ。力になるぞ。」

「かなわんなあ。」

「我夢、こういうことは親の承諾が先だぞ。」

「親父？」

「みらんさん、こんな我夢ですがよろしくお願いします。」

「こちらこそ。」

「あの美術室に帰ったみたい。」

「帰れるよ。」

「みんなでデジタル美術室作ったんだ。すぐにデジタルコンバートしておいで。」

「うん。」

「ではそろそろ結婚式を始めましょう。」

「イエーイ！」

「ただいまより新郎我夢、新婦みらんの結婚式を執り行います。新郎新婦は、今まで、旅のパートナーとして、手を取り合い、試練を乗り越えてこられたと思います。

この結婚が、歩む道を強い光で照らしてくれることを心から願います。

それでは、新郎新婦に誓約をしていただきます。

新郎我夢、汝この女子を娶り、神の定めに従って夫婦とならんとす。汝、その健やかなる時も、病める時も、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命の限り、固く節操を守らんことを誓うか。」

「誓います。」

「新婦みらん、汝この男子に嫁ぎ、神の定めに従って夫婦とならんとす。汝、その健やかなる時も、病める時も、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命の限り、固く節操を守らんことを誓うか。」

「誓います。」

「お二人の誓いの印として指輪の交換を行いたいところですが…。」

「すみません。指輪は無いです。」

「作ってくれる人もいないので。」

「まあいいでしょう。デジタル東京で作って自分で交換してください。では、お二人の誓いが神とラグナロクでつながる世界中の皆様の前で真実永久に守られますように、お祈りを致します。

皆様、黙祷願います。…お直り下さい。

それでは、結婚宣言を致します。我夢とみらんとは、神と会衆との前において夫婦たるの誓約をなせり。

この男女の夫婦たることを宣言す。それ神の合わせ賜いし者は人これを離すべからず。
それでは、誓いのキスを…。」

終わり

ユメノウツツ

<http://p.booklog.jp/book/26230>

著者：中田しん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shishau/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26230>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26230>